

The background of the entire page is a soft, watercolor-style illustration of an underwater scene. It features various shades of teal, light blue, and pale yellow. Stylized coral in shades of pink, purple, and blue is positioned along the left and right edges. Several translucent bubbles of different sizes are scattered throughout the scene, particularly near the top and bottom right.

VELVET silence

AKINORI HASHIMOTO

[illegible]

序

[illegible]

それは満月の美しい夜だった。夏の音が聴こえていた。潮風が温かく頬をかすめていく。燃えるほど赤いお月様の光に照らされたのは、一隻の小舟。それに乗り込もうとしているのは、とある事情を抱えた男女ふたり。カップルなのか、それとも不倫の関係なのか。傍から見れば何もわからない。彼女らの運命は前途多難なのかもしれない。けれど、ふたりで船に乗り込む瞬間は、この世の誰よりも高貴な魂だったに違いない。暗闇の中から迷いネコが現れてふたりの行き先を示している。死ぬのはまだ早いと言っているようだ。ふたりは数奇な運命に惑わされ、弄ばれ、転がされて、ついに決断をした。短い会話のやりとりだったが、ふたりは確かに愛を感じていた。誰に何を言われようとも、この愛だけは貫く。手を繋ぎ歩き出す。ふたりが船に乗り込むとき神様はどのような気持ちでいただろうか。月のしずくが零れ落ちるとき、男は自らのオールを漕ぎ出した。二度とは戻れない。ただ静かに小船は動き出す。

1

1

夏の日差しが竜雲にかかって、シャーベットののようなグラデーションを創り出している。虹色の町並みは、急ぎ足で過ぎ去っていく人たちで賑わっていた。どこからか飛んできたシャボン玉が弾けて僕は正気に返った。大田区最大の歓楽街である蒲田は毎日がお祭りのようだ。焼き鳥の香ばしい匂い、カン高い客引きの声、綿あめの溶けた後の切なさ入り混じった懐かしい気持ちに包まれて、僕は蒲田駅西口の広場で水瀬柚子を待っていた。腕時計を見る。時刻は約束の時間の午後2時を悠に過ぎていた。柚子からの連絡はない。諦めて喫煙所へ向かおうとしたとき、遠くから赤眼鏡の柚子が走ってくるのが見えた。「奎、遅れてごめん。今日はお洒落していこうと思ってたら、お気に入りのズボンが見当たらず。サインも欲しいから100均で色紙とペンを買ってたらこんなに遅くなっちゃった。怒ってる?」

水瀬柚子は一生懸命に言い訳をした。僕と柚子は長い付き合いだから、遅れてくることは想定内だ。「怒ってないよ。そんなことよりも、お手洗いは大丈夫? 土曜日の原宿はかなり混んでるから、行くなら今のうちがチャンスだよ」

柚子はトイレが近いこともあり、僕は親切心で言った。

「奎は相変わらず優しいねえ。でも、大丈夫だよ。その代わり、駅中のコンビニ寄って貰っていい?」

柚子はコンビニで無駄金を使うのでなかなお金が貯まらない。やれやれと思いながら僕たちは駅へと歩き出した。

京浜東北線から山の手線に乗り換え、原宿駅にたどり着いた。明治神宮にお参りするほどの時間的余

裕はなかったが、喫煙所の利用目的で立ち寄ることにした。先ほどから柚子の様子がおかしい。彼女は多動性障害の気があるので、あちこちに目移りしたり落ち着かないのは仕方ないとして、妙に顔が青ざめてうるやうにみえる。額には脂汗をかいているし、何度もハンカチで汗を拭うのだが、一向に汗が引く様子もない。これから会いに行く元宮勇氣は、僕にとっては幼馴染なのだが、柚子にとっては長年の憧れの音楽家だったのだから緊張するのも仕方ない。

緑道の木漏れ日の中、マイナスイオンを浴びて歩く。真夏の暑さに心折れかけた時、オアシスのような自動販売機をみつけた。冷たいジャスミン茶を購入する。それを一口だけ飲んで柚子に差し出すと、彼女は少し照れた様子で受け取った。柚子は僕より8歳も年上のくせに、少女のような笑みをみせることがある。普通にしてればけっこう美人なタイプだと思う。それにけっこうモテるタイプだ。けれど、柚子は50歳近くなって閉経を迎えると一気に性欲がなくなったようで、それと共に、恋愛とは無縁の境地に至ったらしい。まあそのお陰で僕たちは男女の友情を貫けているのだ。

柚子はジャスミン茶を飲んだ後、タバコに火をつけた。先にタバコを吸い終わった僕だったが、つられてもう一本のタバコに火をつけた。ぷかぷかと煙が流れていく先に真っ青な空が広がっていた。

幾分か柚子の顔色が良くなってきたころをはかって、僕たちは竹下通りへと向かった。人の流れに逆らわないように歩いてくと中高生の聖地である竹下通り入口にたどり着く。

クレープ屋さんのバニラの香りや色とりどりの小物につられて、柚子が物欲しげに眺めながら僕の前を歩いている。横並びで歩けないほど人で賑わっているのだが、若者たちは道を譲る様子もない。突然立ち止まったり、集団で騒いだり、路上にゴミを捨てたり、コンビニの前で座ったり好き勝手にやっている。それだけならばまだ良いが、一番困ったのは、彼らが放つ異臭である。多分、本人たちは気づいていないが、付けすぎた香水の匂いというのは、それだけで人に不快感を与えるものだ。香水と汗とが混ざりあうと安い酒でも飲んだ後のような、悪酔いをしてしまう。もともと、異性を性交渉に持ち込むには、酔っぱらわすのが一番なのだろう。竹下通りの出口までたどり着くまで、果たしてこの身体は持つだろうか。そんなことを思っていたら、どうやら柚子も同じように感じていたようだ。柚子はサッカー選手のように、人込みの中を猛然と駆け足ですり抜けていった。50歳の動きにはみえない。僕は駆け足もできないほど、すでに酔っぱらっていた。どうにか、竹下通りの出口までたどり着いた時、僕の血流は、異常なほど脈打っていた。

「奎、大丈夫だった？」

今度は柚子が心配して声をかけてくれた。

「あの香水の匂い。殺人級だよな」

苦笑いを浮かべて僕は言った。

竹下通りを抜けた後は、柚子の案内に従ってついていた。僕の脈拍は相変わらず早い。息も上がって、マスクが湿っているのがわかる程だ。それでも、ここで引き返すわけにはいかない。柚子と元宮勇氣をご縁させてあげなければならない。しかし、こんな時に限って、他人の視線をビシビシ感じるのは気のせいだろうか。弱っている姿など誰にも見られたくない。意地悪く、じろじろと見てくる日本人は、なんて卑屈で狭い島国根性を持っているのだろうか。

街並みを楽しむ余裕もなく元宮のポップアップショップにたどり着いた。僕の幼馴染の元宮勇氣は国

内屈指の人気ミュージシャンだが、お笑いをやったり俳優もやったりしている。そればかりでなく、色々な事業に手を出していて、ついには自ら腰痛に効く椅子発明をしてしまった。それがご縁となり、家具屋さんとコラボして、ソファやテーブル、ラグマットをデザインした。今日はポップアップショップ開始の初日目で、元宮が店舗に来ることはもちろん、はじめて実際の家具に触れられる日でもあった。僕はポップアップショップの入り口で手をアルコール消毒する。店内はサーフ系の音楽が流れていて海のような心地よさを感じた。振り返った先、ソファに座っていた元宮勇氣と視線があった。幸いなことに、この時間帯はお客さんがいなくて暇をもて余していたようだった。

「勇氣」

僕はマスクをとって元宮勇氣を見つめた。彼は突然のことで誰だか分らなかったらしく、一瞬間の間の後に

「奎！ 久しぶりー」

言ってハグを要求してきた。

「お隣さんは彼女？」

勇氣は柚子を見ていった。

「いや、単なる職場の同僚」

僕は照れから職場の同僚と紹介した。だが、柚子は本当の姉以上に濃いつながりを感じていた。

「奎、なんか顔色悪くねえか？」

「いや、大丈夫だ。それよりも、柚子は勇氣の大ファンだから蒲田から連れてきた。悪いけど、後でサインしてやってくれ」

言って僕はよろよろと出口へ向かった。

「おい、奎。少しここで休んでったほうがいいって。なあ」

勇氣の声が微かに聞こえていたが、僕は迷うことなくポップアップショップをでた。

2

2

気が付けば真っ白な天井を眺めていた。脈は正常に波打っている。遠くのほうで微かにはなし声が聞こえている。喉の渴きを覚えてゴホゴホとむせた。瞬間、病室のドアが開いて若き女性看護師が入ってきた。

「柊奎さん。目覚められたのですね。どうされました？」

看護師のネームプレートには藤木花蓮と印字してある。ほんのり石鹸の良い香りが立ち込めた。

「何か飲み物をください」

絞りだした声はガラガラだった。

「今お待ちします。少しお待ちください」

花蓮は病室をでていった。この病院には初めてきたはずなのに、なぜか懐かしさを覚えた。理科の実験室みたいな匂いもけして嫌いではない。不思議なことに、床頭台には花が置かれていた。

「お茶が良いですか？ それともお水にしますか？ ジュースもありますよ」

花蓮はペットボトル飲料を4、5本抱えて微笑んでいる。こんなノリの良い看護師はじめてだ。

「あ、お茶ください」

「お茶でいいんですか？ ビールもありますよ」

くすくす笑いながら花蓮はお茶を差し出した。プライベートじゃあるまいし、病院で酒など飲むわけがない。ユーモアたっぷりのセリフに安堵している自分がいた。なんとなく見過ごしていたが、花蓮は芸能人の浜辺美波にそっくりだ。一般社会には、たまに芸能人よりも美人でかわいい女性がいる。きっと、裕福な生まれなのだろう。

「お金払いますね」

言った僕だったが、財布のありがた解らない。床頭台の引き出しを探したがどこにも見当たらない。救急車で運ばれたには違いないが、まさか倒れた先で盗難にでもあったのだろうか。

「お金のことなら大丈夫ですよ。私のオゴリです。その代わり、退院したら高級フレンチのコースでもご馳走してくださいね」

言って花蓮は右目をウィンクした。昭和なノリが解る子でよかった。この子にだったらフレンチを奢っても悔いはないだろう。

「奎さん。今、ドクターが来ますから少しお待ちくださいね。その前に、私のほうから少し説明させて頂きます。お財布やスマートフォンなどの貴重品はナースステーションでお預かりしています。このお花は奎さんのおねえ様が持って来られました。おねえ様の説明によると奎さんは以前にも精神的要因で入院されていたことがあると伺ってますので、おそらく一時的なパニック発作ではないかとドクターは言っていました。ですので、ドクターからはバイタルチェックをして問題なければすぐに退院できると聞いてます。大事に至らなくてよかったですね」花蓮看護師はそこまで説明すると

「退勤の時間ですので失礼します」

と告げて病室を出ていった。

ほどなくして医者と男性看護師が病室に入ってきた。

「柊奎さん。倒れた時の記憶はありますか？」

医師が尋ねる。

「いえ、気づいたら病室でした」

「倒れた場所は明治神宮内の喫煙所付近ですね。少しだけ発見しづらい場所で倒れていたそうですが、その日は満月でしたので、幸運にもすぐに発見者が現れて救急車で運ばれました」

「そうでしたか。先生、僕はなぜ倒れたのでしょうか？」

「内科的な問題ではなさそうです。個人的な見解になりますが、おそらくパニック障害の一種でしょうね」
医師はカルテをみつめる。

「まあ。心配するほどではないです。奎さんのおねえ様からお薬手帳を持ってきて頂いて拝見しました。精神的な持病をお持ちですから、たまたまパニック発作を誘発するような状況だったのでしょう。気になるようでしたら、心療内科の先生にご相談してみてください」

「今日はもう帰って良いのですか？」

「ええ。構いません」

言って医師は席を立った。

「あ、そうそう。ぶしつけな質問ですが、奎さんはテレパシーを信じますか？」

医師は去り際に奇妙な質問を投げかけてきた。

「難しい問題ですね。僕はキリスト教徒ですので神の啓示はあると思いますが、テレパシーの存在は非科学的に感じます。先生はどう思われますか？」

「私はテレパシーはあると思っています。変な質問してすみません。忘れて下さい」

言って医師はドアを開け病室をでた。

「うちの高原が失礼なことを言いましたすみませんでした」

残された男性看護師が言う。

「いえ、先ほどの先生だけでなく看護師さんもユニークでしたし、なかなか面白い病院でした。小説のネタにもなりそうです。ありがとうございます」

「そう言っていたけると助かります。では、退院の手はずをしますので、お着替えになって受付に来てください」

言って男性看護師は逃げるように去っていった。

僕は着替えをすまして病室をでる。看板を頼りに受付までくると中から男性事務員が出てきた。

「奎さんですね。お会計はおねえ様からお預かりしているお金から頂戴いたしました。この封筒の中に、返還金が約8万円入っています。こちらは領収証とお預かりしていた貴重品です。確認してください」

僕は言われる通りに貴重品を確認した。財布、スマホ、タバコとライター、ハンカチなどの小物類。盗まれたものは何もないように思えた。

「大丈夫です。すべてあります」

「では、これで退院の手続きは以上となります。それと、医師からの伝言ですが、夕刻のラッシュに巻き込まれるとまた発作を起こす恐れがあるので、お金に余裕があればタクシーで帰って下さい、とのことでした。お気をつけてお帰りくださいませ」

僕は迷ったがタクシーで帰ることにした。病院を出る。金髪のボブカットの女が一人たっていた。女は裾の短いワンピースを着ていて、黒いブーツを履いている。道行く人の視線を集めていた。

僕がタクシーを拾おうとした時だった。金髪の女は後ろからくっついてきた。いくら原宿とはいえ気味が悪い。思った矢先

「奎くん。わたし、花蓮だよ」

女は言って金髪のカツラをとった。この黒いショートボブの瞳が大きな女は、間違いなく看護師の藤木花蓮だった。

3

僕は藤木花蓮と一緒にタクシーに乗り蒲田まで帰ってきた。花蓮には高級フレンチをご馳走する予定だったのだが、あいにく僕がパニック発作を起こしそうな予感があったので、仕方なく蒲田のマンションに誘った。だが、下心は一ミリもなかった。花蓮といえば、病室での妙なテンションの高さから一転して、タクシーの窓の外をずっと眺めていた。マンションから少し離れた場所にスーパーがあるので、その近くで降りしてもらった。

「花蓮ちゃん。フレンチはご馳走できないけど、僕の手料理を振舞うよ。どんなのが食べたい？」

「キッチン道具が揃ってるなら私も手伝うよ」

「いや、花蓮ちゃんが好きそうなフレンチやイタリアンの調味料は揃ってないんだ」

「だったら、奎くんの得意なのでいいよ。私、お酒飲むときはほとんど食べないから」

花蓮は思慮深く言う。意外と従順な一面もあるのかと思いきや愛らしく感じた。

スーパーではパニック発作が起こる様子もなく花蓮と一緒にショッピングを楽しんだ。ビニール袋いっぱい詰められた食材や飲み物を両手に持ち、一人暮らしのマンションまで歩く。呑川はライトアップされていて、新緑に染まる桜の木たちが揺れている。川の水面は輝きを増し魅惑的な夜を演出していた。どこからともなくジャズが聴こえてくる。マイ・フーリッシュ・ハート。愚かなるわがこころの名演はビルエヴァンスのライブアルバムだろうか。街のいたる所から良い香りが立ち込めている。商業地区には珍しい一軒家の前を通り過ぎる時、カレーライスの香りがして、家族のこと思い出し、泣きそうになった。花蓮は薄々気づいていたに違いないが、たぶんわざと見て見ぬふりをしてくれた。

マンションのオートロックを外そうとした時、家のカードキーを探したのだが、財布の中にも、カバンを漁っても見当たらず、仕方なく、郵便受けに入れていたスペアキーを取り出してなんとか無事に家に帰ってこれた。

約60平米の2LDKは、一人暮らしには広すぎる。だが、親が残してくれたマンションを勝手に売却するわけにも行かず、姉との話し合いで、リフォームして僕が住むことになった。

花蓮にスリッパを出してリビングルームへ案内する。リビングといっても、ほぼ趣味部屋みたいな仕様

になっている。エレキギターとアコースティックギター、ジャズベースが一台ずつあって、レザー製の黒いソファの前にはサーフボード型のテーブルが置かれている。亡き兄貴が残してくれた柊家自慢のオーディオコンポからジャズのコンピレーションアルバムをかけた。

「良い部屋じゃない！ 奎くんってお洒落だね」

花蓮は頬を紅潮させて言った。

「おつまみ作ってくるから、テレビでも見てて」

僕はそうつげるとキッチンへ向かった。

テフロ加工されたフライパンをクッキングヒーターの上に置き温める。その間に、サラダを盛りつけてシーザードレッシングをかけた。フライパンが熱されたのを確認して、まずはワインナーを炒める。次に、ホタテときのこをバターで炒めて塩コショウであじつけた。サラミやチーズなどのオードブルセットをさらに盛り付けて、リビングルームへ運ぶ。花蓮はネットテレビでアニメを見ている最中だった。

「さあ、食べよう」

僕はグラスに赤ワインを注ぎ花蓮に渡した。

「ありがとう」

言って花蓮は「出会いに乾杯」と付け加えた。

赤ワインが一本空ける頃には、僕たちはすぐに意気投合した。花蓮は若くして母親を亡くしている。僕は両親を交通事故で失った後、兄貴も天国へ旅立ったので、寂しい独り身同士、気持ちを通じ合ったのだろう。いつの間にか、終電の時間は過ぎていて、最悪はタクシーで送るつもりでいた。だが、花蓮が「明日は休みだし泊まっていきたい」というので泊まらせてあげることにした。姉が使っていた部屋が空いているからそこで寝てもらうか、僕が書斎で寝れば良いだけの話だ。

「そういえばさ。なんで金髪のカツラ被ってたの？」

「私、変身願望があるんだよ。職場では明るく振舞っているけど、根は暗いじゃない？ だからプライベートでも、明るい気持ちになりたいくて時々、変装するんだ」

「暗いとはおもわないけどなあ。単に年齢からくるプチ鬱じゃない？ 失礼だけど、花蓮ちゃんは僕よりもひとまわりも若いでしょ。30歳前後の年は結婚適齢期でいろいろ大変だと思うよ」

「そうかもね。ところで、奎くんは結婚願望ないの？」

「ないといえば嘘になるけど、今は無理だなあ。セラピストって収入が安定しないんだよ。だから時折、アルバイトもしてる」

「へえ。どんなアルバイト？」

「倉庫内軽作業とか現場作業が多いかな」

「いいああ。うちは副業禁止だから羨ましい」

「もし副業できるとしたらどんな仕事したいの？」

「えー。色々ありすぎて迷うな」

「子供のころから看護師になりたかったの？」

「うん。小さい頃は普通にお嫁さんになりたかった」

「意外だなあ。花蓮ちゃんの世代は恋愛に希薄と思ってたからびっくりしたよ。それで、どんな人が理想なの？」

「普通だよ。真面目に働いていて、根が正直なら誰でも。あ、もちろん私だけを見つけてくれる人じゃなきゃ嫌だけどね」

「そっかあ。人は見かけによらないな。正直、病院で待ち伏せされた時は、ちょっとだけ怖かったよ」

「怖がらせてごめん。でも、このチャンス逃したら二度と会えないと思ったの」

「僕に？」

「そう……」

それ以上は、ふたり言葉に詰まった。恥じらう花蓮をみますます沼っていく自分がいた。好きとか嫌いとかそんな次元ではない。

前世からの繋がり、俗にいうソウルメイトのような存在だと認識した。ふたりの間にあった小さな壁はすでに取っ払われて、知れば知る程に、この心は彼女のミステリーを追い求める。彼女が眠りについた後で、僕はベランダに出てタバコに火をつけた。一五階の高層階から見えた景色は、まるで永遠のおとぎ話の世界。あの夜空に浮かぶ雲も、あやしい月の光も、眠らない街のひと時の慰安なのかもしれない。幾億の星々の物語が生まれては消されていく。夏の夜の不思議な出会いに、ショパンのバラードが彩りを添えた。

4

4

書斎で眠りについた翌日の朝。カーテンから差し込む光で目覚めた。リビングへ行くと花蓮の姿はなかった。代わりに置手紙が置かれていた。

ソウルメイトの奎くんへ

奎くん、おはよう。

昨夜はおいしいお料理とお酒、ご馳走様でした。

ご家族の秘密も語ってくれてありがとう。

私は一人で勝手に自分だけが辛いのだと思ってました。でも、それは思い違いだった。

奎くんはご両親だけでなく、お兄様もなくされていてとても心に傷を負ったと思います。

それでも、前向きに生きる姿勢に勇気付けられました。

奎くんはいま、パニック発作で大変だと思いますが

私の経験上、パニック発作で死んだ人を一人も知りません。

自然に治るケースがほとんどです。

ですが、病院にはちゃんとかかって下さい。

親御さんの残してくれた遺産があるとはいえ

やはり社会に出でて働いてこそ

アルバイトも充実すると思います。

奎くんとはこれからも良いお友達でいたいです。

ふたりで色々な場所へとお出かけしたりしたいと願っています。

ですので、どうか焦らず、でも確実に治療していきましょう。

買い物などが辛ければいつでも電話してください。

身の回りのことならば私がお手伝いします。

私があなたの苦勞の半分を背負っていきます。

それこそが、私と奎くんが出会った意味なのだと思います。

お互いに運命の人に出会える日を信じて

希望を持って生きていきましょうね。

2023年 9月6日 藤木花蓮

花蓮からの手紙を読んだ後、それを仏壇にお供えして手を合わせた。柚子だけでなく花蓮という力強い見方ができたことで、きっとこの病氣も良くなっていくことだろう。

僕は自転車に乗って柚子のアパートへ向かう。柚子はセラピストのお仕事を週に3回しか入れていない。生活費はご両親が残してくれた遺産で事足りているらしい。お互いに小説家志望なので、最近では、二人きりの小説サークルを立ち上げたばかりだ。書きかけの原稿を見せ合って、お互いに忖度なしの辛口批評をするのだ。先に小説家になると言い出したのは僕だが、柚子のほうが読書経験豊富なので、彼女のアドバイスはかなり参考になる。

柚子は西蒲田に住んでいるため、僕は蒲田陸橋の坂を息を切らして必死に駆け上がっていく。下り坂では、歩行者とぶつからないように慎重にブレーキをかけながら降りる。この瞬間、幼き頃に連れて行ってもらった遊園地のジェットコースターのようにかなりお気に入りである。柚子のアパートは環八沿いにあるため、いつも駐輪場所に困っていたのだが、わざわざ僕のために毎月500円払ってアパートの駐輪所を借りてくれた。柚子には感謝しかない。

柚子の部屋の前までくるとインターフォンを鳴らさずに、電話でワングリした。ほどなくして、すっぴんの柚子がドアを開けてくれた。ねずみ色のスエットのズボンに紺色のTシャツ姿。モグラのように丸まった背中。きっと徹夜で原稿を書いていたに違いない。

「奎、大丈夫だった？」

「ああ。全然、大丈夫だよ」

「まあ、暑いから中に入って」

柚子の部屋はかなり空調が効いていた。彼女は暑がりの寒がりなのだ。きっと冬にはダウンジャケットが部屋着になるに違いない。

僕はいつものようにエナジードリンクを柚子に渡す。

「そういえばさ。病院にお花持ってきたの柚子だろ？」

僕が言うと彼女はきょとんとした顔でこちらをみた。

「お花？ 私、知らないよ。だって、奎が倒れたことも後で知ったくらいだから……」

「誰だろうな。姉が持ってきたと言ってたから、てっきり柚子かと思ってたんだけどな」

「横浜のお姉さんじゃないの？」

「でも、喧嘩してる最中だし。ここ数年、ろくに口もきいてないからなあ」

「でも、やっぱりおねえさんは家族だよ。奎だっていつかは解る。残された遺族は力合わせて生きていくしかないんだよ」

「まあ、暗い話はやめにして仕事しようぜ」

「はいはい。小説のことね。でも、一体いつになったらプロになれるのかしらね」

「うちらだって売れてないだけで立派なプロだって。この前、文学フリマで買ってくれた人いたじゃん」

「わかったよ。じゃあ仕事しよう」

「でも、その前に腹減ったよな」

「焼うどんであればすぐ作れるよ」

「んじゃ、300円コースだ」

「そんなにしないよ。一人160円だから100円でいいよ」

「いつも悪いねえ」

「いいよ。だって、いつもドリンク買ってきてくれてるし。んじゃ作るから、ソファで座ってコーヒーでも飲んで」

僕はいつもの定位置に座ってスマホに取り込んだ原稿をチェックした。困ったことに、自分自身では世界一面白い小説家だと思っているのだが、新人賞では万年予選落ちしている。きっと柚子のほうが才能あってプロデビューも早いことだろう。

暇つぶしに柚子が書いた書きかけの原稿を読んだ。彼女は描写が巧みで、ストーリーも面白い。このレベルで文学賞をとれないというのだから、僕なんか賞とは一生無縁なのかもしれない。

「奎、焼うどんできたよー」

キッチンから柚子の声が聞こえて、僕は席を立った。

この狭い部屋のルールとして、飲食はキッチンで立ち食いというものがある。僕は左手でフライパン

の柄を持ち、そのまま焼うどんを食べ始めた。その間に、柚子は僕の原稿を読むというのがだいたいの日常である。

焼うどんを食べ終えて、部屋を通過しベランダへ出る。食後の一服だけはやめられない。タバコに火をつけた。ふと花蓮のことを思い出す。彼女の創り出すギャップ。金髪のカツラを被った時の花蓮は、間違はなく、蒲田でもよく見かける娼婦にみえた。僕には下心がなかったとはいえ、深夜過ぎには、さすがに性欲を抑えるのに必死だった。花蓮はスレンダーなタイプで胸はけて大きくはないが、時折、エクスタシーの絶頂に至るよりもエロイ顔を見せる。きっと無自覚だろうが、確実に全裸になるよりもセクシーだ。とはいえ、柚子とは年が離れている上に、大事な仕事仲間だからエッチな目で彼女を見たことは一度もない。それは、柚子に魅力がないわけではない、初めて会った時から柚子には彼氏がいたからだろう。僕は彼氏持ちの人間を女としてみていない。まして人妻ならばなおさらだ。男にしてはだいぶ草食なのかもしれない。

僕はベランダの窓越しに柚子を見た。世間一般ならば、とくに結婚していてもおかしくない容姿をしている。にもかかわらず、彼女が独身を貫いているのは長い付き合いだがいまだに謎ではあった。

僕はタバコを消して部屋の中へ入った。服についた匂いを消すため、ファブリーズをふきかける。

「奎、今回の小説リアリティがあっているじゃない。特に、新キャラの個性が光っていると思う」

「読んでくれてありがとう。そのキャラは今一番のお気に入りなんだ」

「誰がモデルなの？」

「病院で知り合った看護師」

「また、お友達ができたのね。奎はイケメンだから仕方ないね」

「全然いけないし、フツメンだよ。それにモテないし……」

「無自覚なところが可愛いねえ。それで、年下なんでしょ？」

「ああ。12歳年下だから今年で30歳か」

「寝たの？」

「まさか。潔癖なのは柚子が良く知ってるだろう」

「あれ、元カノの夏子ちゃんやセフレの沖縄の子はどうした？」

「過去なんかどうだっていいじゃん。それに、沖縄の子はセフレじゃない。ちゃんと本気で付き合ってたよ」

「んじゃ、向こうにとってのセフレだったってことか」

「うーむ。今から思えばそうだったかもな」

「言って僕は思い出し笑いをした。」

はじめてお付き合いした彼女とは2年半おつきあいした後、遠距離恋愛になりあっさりフラれた。二人目は、9つも年上の大人の女性で遊ばれた末、簡単に捨てられた。柚子が指摘した夏子なんかは2週間ほどで元カレのもとへ戻っていったし、沖縄の女子なんかは、ワンナイトラブではじまり、2回目のデートの後、突然、連絡が取れなくなった。僕は遊ぶには楽しい男かもしれないが、彼女たちが結婚を前提に本気で付き合うには物足りない男なのかもしれない。

蒲田東口にある心療内科にて受付を済ませ簡単なテストを受けた。待合室には絵画が飾られていてオルゴールのヒーリングミュージックが流れている。テレビは故障中という張り紙がしてあった。

受付はマスク越しにも美人が多くて、院長先生の美に対する哲学を感じることができる。原宿で診てもらった高原先生のお兄様が経営しているらしいが、いきなりテレパシーの有無について聞いてくるような先生の兄だからかなりクセ強なのは予想できた。患者さんたちはデイケアに通う人が多いみたいで、先ほどから何度もエレベーターの出入りが激しい。水曜日が一番すいていて予約を入れたのだが、約一時間は待たされている。コーヒーでも飲みに行こうと院内にある自動販売機へ向かう時だった。

「柊さん。院長室へお入りください」

受付のアナウンスを受けて案内してもらった。

「柊さん。この通路の突き当たり右奥が院長室です」

淡いピンク色の制服を着た受付の可愛い女性がいる。軽く会釈して、指示されるまま突き当りまで来る。2つドアがあり、一番診察室と書かれたドアをノックして入室した。

「失礼します」

言っただけはリクライニングチェアに腰かけた。院長はカルテを見つめている。

「あなたは大学を中退しているんだね。なぜ辞めたの？」

院著先生は悪びれもなく言う。

「経済的事情と一身上の都合の両方です。交通事故で両親を亡くしているのですが、そのあとすぐ兄も他界しました。両親の死に関しては、遺品整理もあったのでなんとか乗り切りましたが、兄の死が一番ショックでした。なにせ理由が理由でしたから」

「なるほど。それで、紹介状には統合失調症となっているけれど、ご家族を亡くされたつらい時期にかかったんだね」

「はい」

「幻聴や幻覚はないみたいだね。お薬が効いているのでしょうか。それで、今はどんなことが辛いのか？」

「パニック発作に悩まされています。はじめは久しぶりに人込みの激しい街に言ったことによるストレスだと思っていたのですが、地元の蒲田でもパニック発作がおきるのではないかと感じて、電車にも乗れなくなっていました」

「パニック発作ならば良い薬があるよ。大丈夫。すぐ治る。君の場合は小説も書くようなので持病も軽いといえるでしょう。しばらくは週一で通ってもらって様子を見させてください」

「わかりました。ところで先生。先生は慶友大学のご出身なのですね？ ネットでみました」

「いちおうね。ひょっとして君も慶友？」

「はい。もっとも中退してますけど」

「慶友だったら良い話があるんだけど、ジャズは好きかな？」

「ええ。好きです」

「慶友OGの如月琉里というジャズミュージシャンがいるのだけど。彼女は来年の12月に蒲田でコンサートを開くみたいなので、ぜひ、行ってみたら良いのではないかな」

「如月琉里さんですね。チェックしてみます」

「ピアノの腕はお墨付き。それに美人だし胸も大きいよ」

言って高原院長は笑いながら席を立った。診察終了の合図みたいだ。「今日はありがとうございました」と告げて診察室をでた。

僕は自宅に戻ると柚子が遊びに来ているようだった。キッチンから香ばしい匂いがしていた。この部屋のカードキーを渡しているのは、姉と柚子しかない。万が一、僕の身に何かあった場合のことを考えて鍵をわたしたのだ。

「お帰りの。病院どうだった？」

先ほどとは違い濃い目のメイクをした柚子が言う。

「なかなか面白い病院だったよ。やっぱり慶友だったみたい」

「調子のほうはどうなの？」

「先生が言うにはすぐ治るって。でも、まだ電車になれるような気はしないな。歩いてるとまたあの時の記憶がよぎってしまうから」

僕は冷蔵庫を開けてコカ・コーラを取り出した。

「あ、そうそう。しばらく出れないと思って食料品のお買い物したから」

「サンキュー」

言って僕はコーラを飲んだ。

「それと目を閉じて手を出して」

「な、なんだよ」

「いいから。早く」

言われるがまま瞳を閉じて両手を差し出す。ビニール袋を持ち上げたような音が聞こえた。ずしりと両手に温かい感触が伝わってくる。目をあけると衣料品のようなだった。

「これは？」

「ジーパン。少し遅れたけどお誕生日プレゼント」

「ってことはまたパチスロ？ 幾ら儲かったの？」

「ん、内緒。そんなことより履いてみてよ」

「さすがに裸を見られるわけには」

「いいじゃない。家族みたいなものなんだから。ほら」

言って柚子はズボンのファスナーをおろそうとした。

「自分でやるって」

僕は洗面所に駆け込み新品のジーパンを履いた。なんだかサイズが大きい気がするのだが、流行りなのだろうか。40歳を過ぎた僕は若者や女子の服のセンスがイマイチわからない。けど、女性に嫌われない一心で洋服のセレクトは全て柚子にお任せしている。

「どうかな？」

僕ははにかんだような上目使いで言った。

「えー。めちゃくちゃ可愛い。これで花蓮ちゃんとのデートも大丈夫だね」

「なぜ名前を知ってる？」

「悪気はないよ。リビングに置手紙が置いたままだったから見ちゃった。まあ、花蓮ちゃんを連れ込めるように部屋のお掃除もしたから許して」

「んで、化粧してるみたいだけど、どっか出かけるの？」

「元宮君のライブだよ。今、一番の推しだからね」

「サインもらったからってヤケに嬉しそうだな。推してそんなにいいものなのか？」

「生きがいだよ。奎にもいずれ解る時がくる」

言って柚子はタバコを一本吸って出かけていった。その後ろ姿は後光が差すようでとても羨ましかった。

6

6

秋風そよぐ街並みを見下ろしタバコを吹かしていた。今日は通院日で院長と会ったのだが、彼の推しである如月琉里の誕生日ライブが開かれるらしく、いつもより楽し気な様子だった。それほど魅了してしまう如月琉里とはいったい何者なのだろうか。

最近では、電車に乗れないストレスから書斎に籠ってネットサーフィンをしている。ふと如月琉里のことを思い出し、ネットで検索した。インスタフォロワー10万人以上、YOUTUBE動画2000万再生を記録し、歴代のCDアルバムは全てネット通販第一位を獲得している。今、日本で一番目が離せないジャズピアニストのようだ。僕はYOUTUBEを展開し、如月琉里を検索した。表示された画面をみて、僕の体中に電撃が走った。美しすぎる。たれ目で大きな瞳に泣きぼくろが色気を倍増し、さらに見えてくれと言わんばかりの胸を強調するドレス、10センチ以上はある高いヒールを履き、その足は舐めたい

ほどに白い。超絶うまいピアノ演奏に甘い声がマッチして、僕は真夏のマンゴーのように溶けてしまいたいそうだった。

気が付けば、僕は琉里のファンクラブ入会の手続きを開始していた。琉里には一目ぼれだった。共に慶友大学にご縁があり、ジャズが大好きという共通項だけで、運命を感じるには十分すぎた。

医師の情報によると来年の12月に蒲田でコンサートを開くらしいが、とてもじゃないけどそこまで待てない。僕はさらなる情報を探した。すると、今夜のバースデーライブはライブ配信もあるようだ。すぐさま、チケットサイトにアクセスをして、チケットを購入した。カード決済のためすぐに配信のリンクが送られてきた。

2023年9月20日は、生涯忘れられない日になるだろう。生まれて初めてひとめぼれをし、生まれて初めてファンクラブに入会した。ファンクラブのサイトからは、リクエスト曲と応援メッセージが送れると記載されている。僕は迷うことなく参加することにした。

如月琉里様

はじめまして

琉里さんのことは最近になって知ったのですが

今日、衝動的にファンクラブにはいりました。

リクエストは、ヒアズ・ザット・レイニー・デイ

新参者で恐縮ですが、

気分だったらよろしく願います。

2023年9月20日 柊奎

19時を過ぎた頃、琉里のライブ開始に合わせてリビングルームにてワインとおつまみを用意してパソコン画面を開いていた。

この配信ライブでは、ファン同士のチャットもできるようだが、はじめてのライブ参加とあって自己紹介するのも面倒なので、チャットは非表示にした。

定刻から10分経過した後、ついに琉里が登場した。YOUTUBEでみるよりも彼女は綺麗だ。

パソコン画面越しに琉里の表情や手元が良く見える。最初にひかれた曲は、いつか王子様が。白雪姫の挿入歌だ。

ビルエヴァンスを彷彿させる優美なピアノタッチ、洗練された佇まい、気品のある言動、その全てが完成されている。彼女は映画のヒロインのようだった。

2曲目以降は、彼女のオリジナル曲とジャズのスタンダードナンバーとが交互に披露された。良い時間に良い音楽、素晴らしい余韻を残して、1stステージが終了した。次の2ndステージでは新曲を披露してくれるようだ。インターバルは約30分。トイレに行って、タバコを2本ほど吸うには良い時間設定だ。僕は腹が減ったので、早ゆでのスパゲティーを作ることにした。

スパゲティミートソースを食べ終えた頃、2ndステージが始まった。琉里の衣装は真紅のドレス。た

またま今日の僕も赤いポロシャツを着ていたのでシンクロニシティに感じた。

琉里のMCによると、2ndステージではほぼ新曲のラッシュで構成したようだ。曲はメロウなものから攻めた曲まで幅広く演奏された。感動に浸る余韻を残して琉里はステージを後にした。だが、アンコールを求める拍手は鳴りやまない。その拍手にこたえるようにして琉里はステージに戻ってきた。

「今日は足元が悪い中、来てくれてありがとうございます」

琉里の甘い声が響いた。観客に一礼しMCを続けた。

「そういえばリクストを募ってまだやってなかったよね。今日は、雨が降っているということでもとやろうとしていた曲があります。偶然にも、私と同じことを考えていた方がいらっしまったみたいです。その方は今日、会場には来られてないみたいですが、私のファンクラブに入ってくれたみたいです。まあ、今日のライブに来てるお客さんの半分以上は私のファンクラブの方かな？」

琉里が紹介した人物はまさか僕ではないだろうか。だったとしたら、僕は琉里の成功のためにこの先も全力で応援していく。さらに琉里はMCを続ける。

「では、あなたとあなたの大切な人に捧げます」

観客のボルテージは高まっていく。

琉里はカメラを見た。

そして、甘えた声で呟く。

「ヒイズ・ザット・レイニー・デイ」

僕がリクエストした曲だった。

7

7

その夜、夢を見ていた。琉里ヒメと踊る夢を。

海辺で喋りつくした後、話すネタもなくなり、二人の間に沈黙が訪れる。以心伝心。言葉交わさなくても、二人は次に相手は何をしようとしているのか手に取るように解る。二人は甘い口づけを交わす。

「奎、ひとりで何やってんの？」

正気に返って後を振り返ると柚子がいた。

「枕なんかとキスして楽しい？」

言って柚子は豪快に笑った。

「な、なんだよ。インターフォンくらい鳴らせよな」

僕はブーたれて文句を言う。

「このティッシュはなに？」

柚子は意地悪い顔した。自家発電も満足にできない一人暮らしなんて意味がない。

「そんなことより、元宮のライブどうだった？」

「もう最高！ 最前列だったし何度も目が合った。でも、奎を探してたっぽいんだよね」

「僕を？ なんで？」

「やっぱり幼馴染だもん。晴れ舞台を見て欲しかったでしょう」

「そんなもんかね」

「そうだよ。いいなあ。私も元宮君みたいな幼馴染が欲しかったなあ」

「ま、昔はただのマセガキだったけどね」

言って僕はキッチンへ向かった。

「そーいえば、こんな時間に来るなんて珍しいな。どうした？」

「あ、奎にお土産買ってきたから渡しに来ただけだよ。一人エッチは私が帰った後、ごゆっくり」

柚子はカバンから何かを取り出した。

「これ、ダブテックのツアータオル。奎の分も買っておいたから使ってね」

柚子は玄関へ向かった。

「送ろうか？」

「いいいよ。近いし。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

柚子が帰ったことを確認して琉里のデジタル写真集をみようとしたとき、今度はLINEが鳴った。花蓮からだった。

「もしもし、花蓮ちゃん？ 元氣？」

言ったあとで、花蓮からの返事はなかった。

「もしもし？」

ひょっとしたら、このスマホの向こう側でひとり泣いているのかもしれない。女が突然電話をかけてくる理由なんて、たいてい彼氏とうまくいってない時とか面倒くさい事件に巻き込まれているかのどっちかだ。花蓮に限っては、そんなことないと信じた。

「奎くん、今すぐ会いに来て。今夜あなたに抱いてほしい」

「いきなり言われても……」

「私じゃ嫌？」

「嫌とかそんなんじゃないくて、お付き合いしてからじゃないとできないよ」

「……じゃあ。今から奎くんの部屋行っていい？」

「話し相手くらいしかできないけど」

「じゃあ。今から5分後にまた」

「5分後？ 今どこにいるの？」

言った時には通話は終わっていた。

8

8

インターフォンが鳴った。零時を過ぎて日付は変わっている。

ドアを開けるとびしょびよに濡れた花蓮がいた。

「花蓮ちゃん。いま、タオル持ってくるから中で待ってて！」

僕は慌てて風呂場へ行き、棚からバスタオルを2枚取り出す。すぐに花蓮の元へ向かいタオルを渡して、もう一枚のタオルで背中をふいてあげた。

「こんな時間まで外にいたんだね」

僕はすこし憐みの目で花蓮をみた。彼女は金髪のカツラを被っていた。きつと変身したい日だったのだろう。先ほどの発言も花蓮らしくないことを思えば、プライベートでなにかあったのかもしれない。

「いま、着替え持ってくるからお風呂場で待ってて。あ、それともそのままお風呂入る？」

「お風呂はいい。シャワーだけ借りるね」

花蓮は脱衣所へ向かった。

僕は姉が使っていた部屋のクローゼットを漁った。この部屋は時々、柚子が使うこともあり、柚子が使っていた部屋着か、姉が残っていたフリースなどがあったはずだ。しかし、大事なことを忘れていた。下着をどうするかだ。僕は財布とスぺアキーを持って、慌てて家を飛び出した。

マンションから一番近いコンビニへダッシュで向かう。天気は小雨にかわっていた。女性用の下着を探したが、あいにくサイズも解らない。しかも、最悪なことにSサイズしか残っていない。いくら細身の花蓮だって、Sってことはないだろう。意気消沈のままコンビニをでる。

パニック発作が起きてから駅周辺には近づかないようにしていたが、意を決して西口のドンキーホーテへ向かった。

神様！ 琉里さん、柚子、花蓮ちゃん、彼女らが幸せと健康をお祈りします！ そう言い聞かせながら、僕は小雨の蒲田を無我夢中で走り抜けていく。

風俗街の客引きや中国人娼婦たちをよけながら、東口ロータリーを通過し、駅前の道を右に曲がった。

交番のお巡りさんが心配そうに見つめていることに気づきながらも、地下通路の階段を2段飛ばしで駆け下りた。着地しようとした瞬間、水に濡れたタイルにスリップして、派手にすっころんだ。だが、負けるわけにはいかない。すぐに起き上がり、地下通路を抜けていく。出口付近にはネオンの光が反射していた。それは神様が祝福しているかのようにだった。

「やればできるじゃねえか、奎」

僕は無意識に呟いた。歩いている途中に気づいた。きっと亡くなった兄貴や両親がいつでも傍で見守っていてくれたのだ。星々の瞬きがこんなにも美しいとは知らなかった。誰もがみんな痛みや苦しみを抱えながら生きている。この空は、今も誰かが見上げていることだろう。

ドンキーホーテで女性用下着と洋服を買って帰ってきた。花蓮は僕が用意しておいたスウェットに着替えている。

「放置してごめん。お洋服買ってきたから試着してみて」

花蓮に袋ごと手渡すと僕はキッチンへ向かった。久しぶりに走ったせいで喉がカラカラだ。

「わざわざありがとう！」

「どういたしまして」

言って僕はウーロン茶を飲んだ。

「これってドンキの袋じゃない？」

「この時間だとドンキくらいしかなくて。気に入らなかったらごめん」

「そうじゃなくて。奎くん、パニック発作は大丈夫だったの？」

「うん。無我夢中で走ったから変な人に思われたかもしれないけど、発作は起きなかったよ」

「それってすごい進歩じゃない！」

「まあね。健常者には理解されないだろうけど、僕にとっては自信になったよ」

「じゃあ今日はさ。早速、電車に乗ってみない？」

「電車かぁ。まだ時間帯によっては不安だな」

「大丈夫だって。パニック発作は心理的要因が大きいから、私が今日魔法をかけてあげる。それに放っておくとますます不安が大きくなるよ」

「ヨシ！ では隣の川崎でも行ってみようか」

「うん！ その意気だよ。人はそれほど気にしてみてないからね」

花蓮は精一杯励ましてくれた。

「花蓮ちゃんの服は洗濯しておくね」

僕は花蓮の洋服を洗濯機でまわした。

翌朝、起きると花蓮の姿はなかった。リビングルームには手紙が残されている。

9

いよいよ運命の日ですね。

奎くんなら大丈夫！

パニック発作なんてすぐにどこかへ消えてしまうよ。

朝、早く起きたので散歩を兼ねて

食料品を買いにいきますね。

後で、魔法をかけてあげるから

楽しみに待っててね！

花蓮

僕はその手紙を仏壇に供えて手を合わせた。

「兄貴、力貸してくれよな」

小さくつぶやく。

僕は書齋に向かった。書きかけの小説が2作品あり、昨夜の出来事で良いアイデアが浮かんできた。忘れぬうちにワードにしたい。僕が受講している小説家スクールでは、原稿の添削をしてくれない。作品は自力で書き上げなければならない。あくまでも、小説の講評を通して気づかせていく実践スタイルだ。今回の小説は、新人賞に応募しようと決意している。もしも新人賞を受賞したら、賞金で柚子と沖縄旅行に行きたい。彼女は、生まれてから一度も沖縄に行ったことがない。亡き母親の生まれ故郷沖縄の海を柚子にみせてあげたいのだ。

僕が集中して小説を書いている最中、玄関のドアが開く音がした。花蓮が帰ってきたのだろうか。僕は書齋を出た。

「お帰り。遅かったね」

僕は花蓮に声をかける。彼女は手にビニール袋を持っていた。

「そう？ 駅前のスーパーがやってなくて、けっこう探しちゃったからかな」

「スマホで検索すれば良かったのに。ところで、鍵なくてよく入れたね」

「うん。たまたま下でオートロック開けてる人がいたから、後をついてった」

「そっか。じゃあ、朝食の準備手伝うよ」

「奎くんはゆっくりしてて。出来たらリビングに運ぶから」

「了解」

「すぐできるから」

言って花蓮はキッチンへ入った。

僕はスマホで日経新聞を読む。経済のことはなに一つ解らないが、苦手なことを苦手なままにしたいくない思いで購読している。

最近、友人の勧めでZISNをはじめた。だが、仕組みがイマイチわかっていない。僕は生粋の文系人だから数字を見ると眠くなる。

「奎くん、できたよー」

花蓮がキッチンから出てきた。ダイニングのテーブルに次々と料理が盛られた皿を運ぶ。

「うわぁー。朝から豪勢だね」

僕は色とりどりの料理を見つめて言った。

「今日は運命の日だからね。さぁ食べよう」

言って花蓮は微笑んだ。

花蓮の手料理は、クロワッサンに卵料理、アボカドとトマトのマリネやソーセージなどイタリアの朝食を連想させた。食後には、パンケーキまでついてきた。

「今日は良い一日になりそうだ。ありがとう」

アイスカフェラテを片手に僕は言う。

「そうだ。魔法をかけてあげるから。ここに立って目を閉じて」

「目を閉じるの？」

「いいから」

促されるままに椅子から立ちあがって目を閉じた。

次の瞬間、花蓮の香りが近づいてきて、唇に柔らかな感触を感じた。瞳を開けると花蓮が僕の腰に手をまわしてキスをしていた。花蓮の唇が離れていく。彼女はぎゅっとしなやかに僕を抱いた。

「大丈夫。神様はちゃんとしているから」

僕の耳元で花蓮が囁く。鼓動が波のように高まって押し寄せてくる。淡く、そして脆い恋心。この心は、誰を求めて彷徨うのか。

僕たちは京急蒲田駅へ向かった。太陽は燃えるように赤い。秋とは名ばかりで、半そででも良いくらい蒸し暑い。ラッシュの人込みを嫌って13時に家をでた。要塞のような駅のエスカレーターをのぼっていく。花蓮はずっと手を握ってくれていた。喋ると目立つからと言って無言を貫いてくれている。言葉にしなくても分かり合える関係性。それこそが男女の理想なのかもしれない。高原医師の弟が言ったテレパシーの有無について、今ならばあると思えた。

京急快速の横浜方面行がホームに到着した。どんな人種が乗っているのか。過去の被害妄想が脳内をよぎる。中3の時にいじめられたこと、見知らぬ女子高生たちから容姿について馬鹿にされたこと、女という生き物が嫌いだった過去、それらが走馬灯のようにつけめぐっていく。

電車のドアが開いた。僕はフリーズして動けなかった。額から脂汗がたつたって目ににじんだ。電車に乗っていた人たちは怪訝そうに僕を見ていることだろう。

花蓮が僕の手を引き僕たちは来た道を引き返した。タクシー乗り場へと誘導されて、車に無理やり押し込められた。

「運転手さん。京急川崎に向かってください」

後から乗車した花蓮が言った。テレパシーなどないのだと悟った。僕の気持など誰にもわからない。

10

10

たどり着いたのは風俗街にあるカジュアルホテルだった。花蓮が受付を済ませ客室へとむかう。部屋はグレーとホワイトの基調色の落ち着いた雰囲気、ネイビーとイエローのクッションが置かれていた。

「奎くん。とりあえずお風呂はいろいろ。身体が冷えたのだと思う」

花蓮は室内着とタオルを持ってバスルームへ向かった。

なぜ、電車に乗れなかったのだろう。僕はいつだって中途半端な人間だ。中高のいじめに耐えて大学進学したのに、両親が死に、兄貴までも旅立ち、生きていても何一ついいことがなかった。いっそのまま僕もみんなの後を追おうか。

「奎くん。湯舟たまったよ。早くはいろいろ」

花蓮の声は弾んでいた。僕は我に返る。

「はいろいろって一緒に？」

「うん。身体洗ってあげる」

「大丈夫。赤子じゃないし、一人で入れるよ」

僕は風呂場へ向かった。

赤いポロシャツを脱ぐ。下着は汗でびっしり濡れていた。着替えなど持ってきていない。後でコンビニへ行かなければならない。しかしいまは、パニック発作手前の状態から、ようやく一息をついたばかり。次に発作を起こしたら、とてもじゃないけど生きていくのが恥ずかしくてたまらない。

僕はシャワーで汗を流し、湯船につかった。体の芯から温まると、良い考えが浮かんできた。帰れないならば、このままホテル暮らししてしまえばいい。花蓮もいずれは仕事でいなくなるだろう。柚子だって

ご両親の遺産があるとはいえ、働かなくてはならない身分だ。幸いなことに僕は、両親の遺産と兄貴がかけていた保険金がある。それだって、豪遊するほどあるわけじゃないが、贅沢しなければ乗り切れる。浴室のドアが開いた。

「奎くん。背中洗ってあげるね」

花蓮はズボンのすそを折って入室してきた。垢すりにボディソープをプッシュし泡立てていく。

「花蓮ちゃん。大丈夫だから」

「いいから。大事なところはみないからここ座って」

「……」

言うことを聞かないと後が怖い。僕は股間にタオルを巻いて湯舟から出る。花蓮が指定する椅子へ座った。

「よしよし。いい子だね。ママが洗ってあげますからね」

花蓮の優しい波動が伝わってくる。垢すりのゴシゴシという音が浴室内に響いていく。僕の体はアロマの香りで満たされた。

「なんだか眠くなってきたよ」

言って僕はあくびをした。

「あら。大変！　じゃあ髪の毛は後で洗いましょう。いま、シャワーで洗い流すからね」

花蓮が背中越しにシャワーをかけるとますます眠くなってきた。

「奎くんって意外に筋肉質なんだね」

嬉しそうに花蓮が言う。

「半分は肉体労働者だからさ」

「看護師だって肉体労働者だよ。今度、私の腹筋みせてあげるよ。バキバキで笑えるから」

花蓮の笑い声が浴室にこだまする。

シャワーで洗い流して貰った後、花蓮はおとなしく浴室をでていった。僕は最後の力を振り絞って、ホテルの部屋着をきた。浴室を出てダブルベッドに横になった。

「私もお風呂入ってくるね」

僕の背中をさすりながら花蓮がいう。火照った体にその手はひんやりと冷たくて気持ちよかった。すたすたと遠ざかっていくスリッパの音が聞こえて、僕は琉里ヒメのことを想った。

琉里が弾いてくれたヒアズ・ザット・レイニー・デイ。なぜ、僕のリクエストをアンコールに持ってきてくれたのだろうか。かつて夢見ていた願いが、奇跡の出会いにより、突然、叶うことを雨に例えた名曲。僕と琉里の出会いの曲。

窓の外を眺める。今夜は中秋の名月。月の光は誰人にも優しい。この世の金銀財宝を全て集めたとしても今夜のこの輝きには敵わないだろう。アロマの香りが消えるまで、夢が舞い散るその時まで、例えば、この身滅びても、今夜の月をずっと眺めていたい。琉里ヒメと夢の中で逢えたら、僕たちは永遠の時間の中にいて、もう二度その手をと話すことはない、そのように誓うことだろう。

1
1

2023年9月30日 神奈川県川崎 晴れ

体調は良好。昨夜、深夜に起きてコンビニへ行った。

花蓮は、僕の隣ですやすたと寝ていた。

変身願望がある彼女の気持ちも、今ならばわかる気がする。

ホテルは風俗街にあつて

あやしい娼婦たちが僕に声をかけてきて

でも、彼女たちの要望には応えられそうにない。

僕はもともと性欲が薄いからだ。

こんな時、通常の男ならば

喜んで金を出して彼女たちを抱くだろう。

僕はそんな普通の男に変身してみたい。

金をばらまき、女を抱くことは

果たして、どれだけの快感だろうか。

所詮、お金なんて信用を数値化したものでしかない。

信用などいらないから、普通の男に生まれたかった。

もしくは、親の代わりに僕が死ねばよかったのだ。

そしたら、兄貴だって死なずに済んだことだろう。

この世は悪意で満ち溢れている。

夢を追うものを応援する人すくなし。

そんな中、柚子や花蓮と出会えた奇跡

生涯、大切にしていきたい。

終奎

僕は日記を書き終わると寝ている花蓮を横目に、タバコを吹かしに外へ向かう。カジュアルホテルのロビーには、男女入り混じって談笑する大学生風の観光客の姿があった。彼らの輪をすり抜けてホテルの外へ出る。

僕はジーパンのポケットからメビウス10ミリロングとライターを取り出した。タバコに火をつけて空を眺める。雲一つない晴天。嫌気がさすほど時間は無限にある。単発バイトアプリからはひっきりなしに通知がくる。どの業界も人材不足とは言うが、僕たちが学生時代には就職先など皆無だった。正確に言えば、二人に一人しか就職できなかった。俗にいう就職氷河期世代である。人が足りないからと言われても今更遅い。学のない僕たちはフリーランスとして生きていく道を選んだ。どんなに金がなかったとしても、悪魔に魂売るくらいならば死んだほうがマシだ。いきすぎた商業主義には本当にイライラしてくる。金のためならば何でもやる人間など信用できない。それが、文系人間の僕の考えだ。

僕は携帯灰皿にタバコをいれる。視界の先には、ソーブランドがずらりと並んでいて、黒服のボーイが街を行きかう男たちに声をかけていた。遠くのほうで金髪ボブの黒いサマードレスを着た娼婦風の女がこちらを見ている。胸は無防備なまでに開いていた。僕は無視して部屋へ帰ることにした。

部屋へ戻ったが、花蓮の姿はなかった。つまらなくルームサービスのメニューを見ていた時、部屋のドアが開いた。さきほど風俗街に立っていた娼婦だった。

「お兄さん。ご指名ありがとうございます。たっぷりサービスしてあげるね」
言って娼婦は服を脱ぎ始めた。

「ちょっと待て。誰も指名などしていないし、金も払ってない」
僕が嫌悪感をあらわにすると娼婦は高らかに笑った。

「面白い人ね、あなた。私の胸の中で眠りなさい」
言って娼婦はベッドに入っていく。

「さあ早く」
娼婦は下着を脱いでこちらへ投げた。

「誰なんだ。おまえ」

「名乗るほどの女じゃないもの」
女は言うとう慰行為をはじめた。

「はぁん。あなたの肉が欲しい……」

僕はますます苛立っていた。ため息をつく。

ばたんとドアが開いて何者かがはいつてくる。目を凝らしてみると花蓮だった。

「はい！ カット！」

花蓮はまじまじとこちらを見た。

「奎くん、駄目じゃない。据え膳食わぬは男の恥よ」

花蓮が言うとう娼婦はくすくす笑った。

「もしかして、どっきり？」

きょんとんとして僕は言う。

「花蓮ちゃん。いい絵が撮れたよ。ありがとう」

娼婦は裸のままベッドから出てきた。服を着ながら「最高に面白い子ね。奎くんって」と言った。

「昨日なんか一晩中よこに寝てたのに、指一本触れてこなかったの」

花蓮はやれやれといった表情をした。

「あんた一体だれなんだ？」

僕が言うと娼婦風の女は名刺を差し出した。

「ただの無職の暇人よ」

名刺にはマルチアーティスト沙耶香と書かれている。ますます謎は深まるばかりだった。

12

1
2

その日の夜、花蓮は夜勤で出かけていて、部屋には沙耶香と僕の二人きりだった。沙耶香はこの近くに住んでいるらしく、部屋から服などを運び込んだ。ウクレレもある。どうやら、僕がパニック発作を克服するまでは、沙耶香と花蓮が面倒をみてくれるようだ。先ほどから沙耶香はウクレレで弾きながら歌っている。どこかで聴いたことがあるようなメロディーと歌詞。

「ねえ。それって誰の曲？」

僕は尋ねた。

「松任谷由美のセプテンバーブルームーンよ。昨夜は中秋の名月だったからねえ」

「何か思い出の曲なの？」

「元カレとの思い出の曲なの」

言って沙耶香は虚ろな目をした。

「忘れられないほど魅力的な人だったんだね」

「ええ。あんなに素敵な人は二度と現れない」

「なぜ、別れたの？」

「ある日、彼は突然天国へ旅立った。私との誓いを破った。あんなに激しく愛し合って、生涯を誓う仲だったのに……」

沙耶香は一瞬だけ落ち込む様子をみせて上を向いた。そして話を続けた。

「私が悪かったのよ。彼とお付き合いしていた当時、私はうつ病を患っていた。働けなくなった私は、彼にすがるように結婚したいと申し出た。彼は急な申し出にも嫌な顔一つせずに了承してくれた。けど、彼はその翌日、自宅で……」

沙耶香は嗚咽を堪えた。

「センチティブなことを聞いてごめん」

僕は沙耶香の背中をさすった。

「世の中には色々な人がいる。深く愛し合う関係性があれば、傷つけあうだけの人たちもいる。けど、生まれたときはみな、純粹なる魂を持っていたはずだ。人は亡くなったら天国へ帰るのだと僕は信じている。きっと沙耶香さんの彼も、僕の兄貴もこの世界で生きていくには純粹過ぎたのさ。ただそれだけ。だから、お願い。自分を責めないで。きっと、沙耶香さんには言えない深い理由があったはずさ」

言って僕は天井を見つめた。

「お兄さま、ひょっとして自殺？」

沙耶香の問いに僕は軽くうなづいた。

沈黙の時間が流れ、僕は意を決して静寂を裂いた。

「両親が亡くなった後、うちの兄貴は家業を継いで社長の座についた。彼は誰よりも純粹で人を信じやすい人だった。だから、悪意に満ちた連中に、会社を丸ごとだまし取られたんだ。甘い話に乗せられ、気が付けば巨額の負債だけが残され、社員たちは路頭に迷う羽目に……」

僕は深く息を吐いた。軽く深呼吸して整えてから話を続けた。

「兄貴はこれ以上迷惑をかけたくないって、たった一人で、その全ての責任を抱え込んで……。この世の悪意に耐えられなかったんだ。もっと早く僕が気づいていれば……。あの人を救えたかもしれないのに」

僕は自責の念に駆られた。

「奎くん。大丈夫。私たちがいるから。私と花蓮があなたを守る」

沙耶香は僕の手を優しく包んだ。

13

13

沙耶香との生活も数週間立とうとしていた。沙耶香は僕を献身的にサポートしてくれて、相変わらず絵を書いたりウクレレを弾いたりアーティスト活動をする傍ら、株やFX、投資信託のチェックをしているようだった。僕は琉里ヒメの音楽を聴きながら、彼女のSNSをくまなくチェックしていた。なにせ琉里はブログだけでも15年以上記事を書き溜めているから、過去記事から毎日5記事ほど読んだとしても、あと半年間は楽しめそうだった。

花蓮と言えば、相変わらず謎めいた女で、時間の都合がないように思えるくらい自由に来ては、自由に帰っていく。現在、看護師の仕事をしているのかも怪しいくらいだ。

最近、僕は琉里ヒメを応援する目的でブログをはじめた。彼女のオリジナル楽曲のレビューを書いた

り、彼女にまつわるネタを引っ張ってきて、好き勝手に書かせて頂いている。記事の初めには必ず、琉里ヒメの YOUTUBE のリンクを張るのだが、最近凄いいことに気づいた。僕の記事で紹介した琉里ヒメの衣装や楽曲を彼女はリアルな配信ライブや SNS 投稿でも、僕が紹介した衣装と同じ色の洋服を着たり、同じ楽曲を弾いてくれるのだ。めったに、SNS のコメントに返信しない彼女だが、僕がコメントすると比較的高確率でいいねや返事をくれる。そのことが、僕には楽しくて仕方ない。プロのジャズミュージシャンとは言え、エンターテイメントのジャンルに属するから、ファンとの交流やマーケティング意識でそうしているのだろうとは思うが、それにしても神対応をしてくれる。パニック発作により引きこもりがちな生活を送る僕の生活には、琉里ヒメの応援は欠かせないものとなった。

ピンポンとインターフォンが部屋に鳴り響いた。黒いニット服にジーンズを履いた花蓮だった。今日は金髪カツラの日のようだ。

「いやあ、遅くなってごめん。ちょっとパチンコ行ってた」

花蓮は両手にビニール袋を持っていた。

「花蓮ちゃんがパチンコって珍しいね」

沙耶香はカラッとした感じで言った。

「ちょっと、お手洗い借りるだけのつもりが、いつの間にか遊んでた。でも、お小遣いもらったから沙耶ちゃんと奎くんにお土産買ってきたよ。今日はパーティーしよう」

「あいにくだけど、今日は用事があるの。それにいつもこの根暗な男の子といると私までうつ病になってしまいそうだわ。だから、今日は花蓮ちゃんがお相手してあげて」

言うと言葉は荷物を持って出て言った。

「なにに？ ああ、いいじゃない態度。なんかあったの？」

花蓮は僕にたずねる。

「いや、生理でカリカリしてるだけじゃない？」

「生理なんてとくに干上がってるよ。だって沙耶ちゃん今年で60歳だもん」

「あの人60歳なの？ もっと若いかと思った」

「まあ、いなくなった人の話はやめましょ」

言って花蓮は、ビニール袋から飲み物やお菓子、焼き鳥などを取り出しテーブルに置いた。

「二人の出会いに乾杯しましょ。セカンドラブ」

言って花蓮はレモンサワーを差し出した。

「セカンドラブって。ずいぶん古い曲を知ってるんだね」

「奎くんって中森明菜ちゃん好きでしょ？ 顔に出てるわよ」

「よくわかったね。明菜ちゃん大好きだよ。でも、リアル明菜ちゃん世代ではないけどね」

「ふふ。可愛い」

花蓮は目を細めた。

「花蓮ちゃんが好きなアーティストは？」

「たぶん言っても解らないよ」

「いうだけ言ってみてよ」

「ジョニ・ミッチェルかな。でもレコードじゃなくてさ、昔付き合ってた彼がボロボロのカセットで聴かせてくれたジョニが好き。あのひずんだ音よりカッコいいアーティストに、まだ出会ったことないの」

「彼女の歌声は、ボロボロのカセットの音みたいに、花蓮ちゃんの心に深く響いたんだね」

僕は静かに言った。

「うん、そうかもね。奎くんも琉里ヒメの曲、そんな風に聴いてるのかな？」

花蓮は僕の目を覗き込むように、首を傾げた。

「うん、まあ……。彼女の情熱的なピアノ演奏には、何度も救われたよ。でも、花蓮ちゃんと沙耶香さんがいてくれるから、一番の葉かも」

僕は照れ隠しで視線を逸らした。

「ふふ。それは嬉しいな。でも、奎くん、さっき私がセカンドラブって言った時、ちょっと戸惑ってたでしょ？」

花蓮は意地悪く笑った。

「僕はいつだってファーストラブだよ」

僕は冷静さを取り戻した。琉里ヒメの美しいお顔が脳内に過ったからだ。

「まあ、夜は長いのでからゆっくり時間をかけて楽しみましょう」

花蓮は小さく「カンパイ」とつぶやく。

僕はいつだって初恋のような真剣さと純真な気持ちで女性とお付き合いしてきた。だが、もしもセカンドラブのような心変わりがあるとすれば、花蓮のような愛らしい女性を放っておかないことだろう。でも、いまは……。

12月に入ると川崎風俗街はますます活気づき、色とりどりのネオンが瞬いて、街をライトアップしていた。今年も残すところ僅かだね、という声があちこち行き交っていることだろう。相変わらず僕は、この通りの向こう側には出られない。近くには、僕が大好きなおいしいラーメン屋さんだってたくさんあることも知ってる。しかし、いざ出かけようとなると、あの原宿での出来事や電車に乗れなかった恥ずかしい体験などが脳内をぐるぐると巡る。安全領域を抜け出すことは、今の僕にとって恐怖以外の何

物でもない。何か用事があるとすればコンビニで事足りる。幸いな事にコンビニくらいだったら問題なく行ける。今の僕にはコンビニが砂漠のオアシスにも感じられるのだ。

花蓮や沙耶香とのホテル暮らしもだいぶ慣れたものだ。彼女らもすっぴんの顔を見られる恥じらいなどないようだ。毎日が修学旅行のような気分だ、「あと一人いれば麻雀できるのにね」なんて呑気に話している。同じ釜の飯を食う仲。自然と連帯が生まれていた。

今日は、あいにくメンタルの調子が悪い。タバコの吸いすぎかもしれない。動悸や息切れがするし、肌や髪の色つやも良くない。デトックスするつもりでお茶をがばがば飲んでいたせいで、吐き気はするし、知恵熱はえるし、鼻水はでるし、「最悪」以外の言葉がでない。こんな時に限って花蓮も沙耶香もない。でも、薬を買いに行く気にはなれない。「何かあったらすぐに電話して」と言われているけれど、電話するほど具合が悪いわけじゃない。中途半端な風邪をひいてしまったようだ。

僕は先ほどからベッドに横になって、スマホでSNSをチェックしていた。何か楽しいことでもないやとってられない。琉里ヒメの最新情報を誰よりも早くゲットして、コメントを残し、自らのブログに記事をかくこと。それだけが唯一の楽しみである。

僕は起きて早朝にいったココアを飲もうとした時、ピコンッとスマホから通知音がした。琉里ヒメが記事をアップしたに違いない。はやる気持ちを抑え、ゆっくりと楽しむようにインスタのアイコンをクリックする。

こんにちは。

ジャズピアノリストの如月琉里です。

今日は、寒いね。

私は、家の中でもダウンジャケットを着こむほど

寒いのが苦手ですが

皆様、いかがお過ごしでしょうか？

年末年始で忙しくされている方も多いと思います。

そんなわけで

突然ですが、皆様に朗報があります。

なんと！ この度

私の4枚目のニューピアノソロアルバム

【ムーン&フェイバリットシングス】が発売になります！

アルバムリリースを記念して

来年、全国ツアーが決定しました。

それに先駆けて

2023年12月24日

大田区民ホール アプリコ大ホールにて行われる

チャリティーコンサートに出演が決まりました。

このコンサートでは私の新しいアルバムの中から

数曲お届けできる予定です。

ぜひ、ご家族、ご友人をお誘いして

またはご夫婦やカップルで

遊びに来てね！

ジャズピアノリスト 如月 琉里

僕は記事を読んで口を手でおさえた。一瞬、冗談だろうか？ と思い、記事を何度も見返した。頬をつねると確かな痛みを感じる。夢でもない。ということとは、まさか……

「うおー！ 琉里ヒメが……蒲田に来るぞ！」

僕の五感フルに目覚めて下半身にも血が巡った。

「よっしゃあ！ 今度こそ、病魔に勝ってやる！」

僕は冷静さを失っていた。純粋にSNS越しに憧れていた人が、地元の蒲田に来られるのだから、仕方ない。先ほどの風邪のような症状はいつの間にかどこかへ消えていた。

僕は琉里ヒメのオフィシャルサイトからチャリティーコンサートのチケットを申し込んだ。すぐにURLが送られてきて、簡単な個人情報を入力し、最後はクレジットカードで決済した。

「よっしゃ！ 帰ろう。今すぐ帰ろう、わが故郷の蒲田へ……」

言葉にならないほどの歓喜が沸き上がってくる。蒲田には良い思い出がなかった気がしていたが、それは勘違いだった。未来が変われば、過去が変わる。僕はベッドに横になって瞳をとじる。

懐かしき、声。ぬくもり。優しい柔軟剤の香り。絹のパジャマを着て、お気に入りのぬいぐるみを抱いて眠りについた、いつかのメリークリスマス。その日、父親は不在だった。母親の焼いた七面鳥を前にして、兄貴と姉は大興奮。僕は七面鳥よりも、ビニール袋いっぱいのお菓子やジュースにときめいていた。お調子者の兄貴がへたくそなクリスマスソングを歌う。姉は大はしゃぎで手拍子する。僕はポテチをむしゃむしゃ食べながら、ディズニー映画を観る。母が、「おばあちゃんが寝てるのだから、静かにしなさい」と注意すしておとなしくなる。だが、その30分後には、みんなでカラオケしてはしゃいでいた。厳格な父親の元に育った兄弟など、どこか家庭でもそうだろう。うるさい父親が不在という場面ではなく、羽を伸ばせない。僕たちは、波平が不在のサザエさんのような心境だ。

やがて、波平は帰ってくる。しかし、いつもの波平ではない。今日は、クリスマスプレゼントを携えて帰ってくる。みんな知っている。密かに、寝たふりをしながら、父親の帰宅を待つ。

幼き僕は、二段ベッドの下でとくに寝ていた。いつもびっくりしたような表情をしているお気に入りぬいぐるみ『あっぱくん』もこの時ばかりは寝ていたと思う。僕はおっしっこがしたくて、暗闇の中、ぼんやりと起きた。枕の脇には、サンタさんからのプレゼントが置かれていた。エントツもないのにどうやって家に入ったのだろうか？ 僕は不思議で仕方なかった。

僕は気が付けばいつの間にか寝ていたようだ。浅い眠りの中で、思い出と夢とが交差して、泣きそうになった。どんなにお金を支払ったとしても、兄貴の命が買えるわけではない。両親が生き返る魔法な

ど、この世には存在しない。しかし、琉里ヒメを蒲田に呼んでくれたのは、両親や兄貴の計らいなのではないかを感じる。

テレパシーの有無について、高原医師に聞かれた時、にわかに信じていなかったが、僕はクリスマスチャンとして神様の啓示を強く信じる。琉里ヒメと出会えたことは、まさに神の導きであり、彼女が蒲田で行われるクリスマスチャリティーコンサートに参加するのも、全て神様が与えてくれた運命の人なのだろう。初めて見た時から、他人という気がしなかった。まるで、幼少のころからの友達だったような親近感を覚えた。

僕にとって、琉里ヒメを応援することは、ライフワークであり、それ以上に、もっとかけがえない何かを教えてくれる女神さまへの報恩感謝の祈りの活動なのだ。

15

15

その日の夜、僕は沙耶香にお別れの挨拶をしていた。沙耶香は僕の決意に驚いた様子だった。

「本当に行ってしまうのね」

沙耶香は目頭をおさえた。

「ここでは大変お世話になりました。この感謝の気持ちは一生忘れないよ」

「奎くん、何にも出来なかったけど、これ持って行って」

沙耶香は小さな袋を僕にくれた。

「何が入ってるの？」

「イヤホンと市販の鎮痛剤よ。電車の憂鬱なんて好きな音楽でも聴いてれば幾らでもやり過ごせると思うてる。私の友人にも奎くんのような人がいてね。その人は神経過敏で被害妄想が激しいから、他人の話声をきくと悪口言われてるみたいな気分になるんですって。だから、移動中は必ずイヤホンして音楽を聴いてると言ってたわ。あと、鎮痛剤は、お守り。パニックになる前に飲んでみて。神経過敏の人は、薬でものんですこし眠いくらいのほうが丁度よいわよ」

「こんなに良くてくれて……。ありがとう」

胸の奥から熱いものが込み上げてくる。

「私たちは、まるでいちご同盟ね。たった一人の命のために、生涯の友情を誓う。ただ、生きる、と」
いちご同盟は、三田誠広著の青春小説だ。15歳の少年少女の友情、恋愛、生と死をテーマにした大

ベストセラー作品で、僕も15歳になる少し前に友人から進められて読んだ。生きていることは苦悩の連続かもしれないが、生きろ、という熱いメッセージに号泣した記憶がある。沙耶香からの粹な言葉に、青春がフラッシュバックして、また泣きそうになった。

僕は沙耶香のお守りの鎮痛剤を一錠飲み、スマホにイヤホンを繋げた。BGMは、琉里ヒメの演奏するジャズのスタンダードナンバー MISTY だった。

「じゃあ、そろそろ行くね」

言って僕は軽く深呼吸した。

「どんな時でも奎くんの幸せを祈ってるからね」

沙耶香と握手を交わし、僕は部屋を出た。

ホテルを出ると、辺りはすっかり暗かった。花蓮に買ってもらったユニクロのライトダウンだけでは、この寒さに負けてしまいそうだった。闇夜の中、今日も風俗街を行きかう人たちは、むつつりと口元や鼻の下をゆるめて、ターゲットを狙う。彼らには、泡ヒメとの情事こそが生きる糧なのだ。それに対し文句を言う権利はない。ピンクサロン、ソープランド、テレクラ、立ちんぼ、ちよんの間などが激しくしのぎを削る街、川崎堀之内ソープ街。ここは、天国に行きそびれた囚人たちの最後のヘブンである。金、かね、カネ。いきすぎた商業主義に虫唾が走る思いだ。使っちゃまえ！宵越しの金など持たずに、今を生きて。僕は汗水働いてもなかなか報われない彼らに対し、そんな風に思った。また、それは僕に対していちばん響いていることには全く気付いていなかった。

歩みを進めると、赤と黒の看板が目に入ってきた。焼き肉の匂いがする。煙を浴びた僕は、浅草寺の浄香炉を思い出す。刹那、知恵の宝珠を授かる。僕は音楽のボリュームをあげた。大丈夫。人は他人のことなど興味がない。自分自身のことでは忙しいのだ。琉里ヒメのミックスリストからは、あなたと夜と音楽とが流れた。

いよいよ京急川崎駅へ向かう最後の信号までたどり着いた。他人からの視線に敏感な僕は、ずっと車道側の信号を眺めていた。脈はすこしはやまっていた。

歩道の信号が青変わる。一瞬、唾を飲み込み目を閉じた。意を決してすぐに歩き出す。変わりゆく街並みを味わう余裕などない。今は、琉里ヒメに会いたい一心で僕は戦っている。

駅前は大混雑していた。この狭い道にびっしりと人で溢れていた。音楽は、琉里ヒメのオリジナル曲、ムーンライト・セレナーデに変わっていた。

難なく駅前の改札までたどり着いた。ここまでは前回と同じだ。問題は電車に乗ることだ。地元の駅ですらパニック発作を起こすようになった原因である殺人級の香水の匂いを少しでも恨んだ。

僕は改札を抜けてホームにたどり着いた。時刻は20時をまわっていた。今日は、金曜日とあっていつもよりは混雑しているが、ラッシュを回避したおかげで、ゆっくり帰れそうだ。

向かい側の横浜方面のホームには、今にも落ちそうなくらい人で溢れている。東京方面へ向かうことに少しでも優越感を覚える。仕事帰りのサラリーマンの姿は少なく、この時間はとくに帰っているか、飲みにも出かけていることだろう。

眩い光がホームを照らした。左に視線をやると電車が速度を落としながら進入してくる。僕が立って

いる5番線ホーム前を通過していった。ぴりりと電撃が走り緊張していることを自覚する。悪い予感が過ったが、すぐに丹田に意識を向けた。

電車のドアが開いた。

降りていく人たちにバレぬようにうつむき加減でスマホに目をやった。待ち受け画面の琉里ヒメの写真とBGMの『いつも二人で』が、この世のものとは思えぬほど華麗で雅やかに感じた。

僕は電車に乗った。琉里ヒメの魂と共に。

16

16

僕は拍子抜けするほど簡単に、蒲田に帰ってきた。上弦の月が東の空に輝き、オリオン座の近くにふたご座を見つけた。冬の透き通る空気を胸いっぱい吸う。年末の蒲田は相変わらず賑やかで、僕たちを夢の世界へと誘う。数々のエンターテインメントを生み出したキネマの天地、蒲田。通りゆく人たちの一人一人から、無数のドラマが見え隠れする。主人公なのか、悪役なのか、それともただのエキストラか。解らないが、この小さな街でそれぞれの夢を抱いて生きていることだけは確かだ。

マンションのエントランスを抜けて、カードキーをかざしエレベーターホールへと向かう。自宅の鍵を開けて部屋に入ると、柑橘系の美味しそうな香りがしていた。ダイニングルームには柚子の姿があった。彼女はラフな部屋着に前髪をピン留めして食事をしている様子だった。

「おかえりい！ 今回の旅は長かったね。どこ行ってたの？」

柚子は箸を休めて言った。水炊きを食べている最中だった。微かにアルコールの匂いがした。よく見ると顔が少し赤い。

「パニック発作克服の修行だよ。場所は秘密」

まさか風俗街に拉致されていたなど言える訳がない。

「そっか。まあそんなことよりおいすいでしょ？ 鶏肉と銀タラの水炊きにしたらけど、食べる？」

「美味そうだな！ ちょっとコーラ買って来るわ」

「コカ・コーラで良ければ冷蔵庫に入っているよ」

言って柚子は立ち上りキッチンへ向かった。

「水炊きとコーラ、幾らした？」

僕はジーパンのバックポケットから財布を取り出した。

「いいよ、今日は。無事に帰ってこれたってことは、パニック発作克服の証明じゃん！今日は私のオゴリだ！」

柚子は胸をドンっとはたいた。まな板みたいな貧相な胸が痛そうにも感じた。

「悪いねえ。じゃあ、お言葉に甘えて」

僕は缶のコカ・コーラをプシュッとあけた。

「それで、長いこと家をあけて外泊してたようだけど、お金は大丈夫だったの？」

「大丈夫だよ」

「誰といたの？ 花蓮ちゃん？」

「いや。花蓮じゃない」

「じゃあ、一体どこで何をしていたって言うのよ。はつきり言わないと解らないじゃない！」

「なんでそんなことまで柚子に話さなきゃならないの？」

「あなたのことでどれだけ心配してたと思ってるのよ。奎は、パニック障害だけでなくいちおう統合失調症なのだからね。そのことを忘れないでよ。月に一回は筋肉注射うたなきゃならないのに、病院行っていないでしょ？ これじゃ良くなるものもよくならないよ」

「だから、僕の勝手じゃんそんなの。僕の人生は僕のものだ」

「まさか、琉里が関係してるんじゃないでしょうね？」

僕は頭にきて缶をテーブルにドンッと置いた。鈍い音が響いた。

「琉里ヒメを呼び捨てにするな！」

「……。バカじゃない」

「帰れよ。今すぐ」

柚子は突発的に立ち上がり、身支度をはじめた。

「待てよ。家の鍵も置いてけよ」

「……」

ばこッと柚子は荒々しくカードキーを床に投げつけて、出ていった。

17

17

2023年12月24日、休日のクリスマスイブ。琉里ヒメも参加するチャリティーライブが開かれる。晴れ間が広がる蒲田の街をひとり歩く。ダウンジャケットの下に、ヒートテックとシャツ、スウェッ

トを着ていてもまだ寒い。天気予報によれば、今期いちばんの冷え込みになるそうだ。予報は当たった。アウターから靴まで、今年の流行色のブラックコーデで揃えた。エタノールの香水は嫌いだ、オイル製の香水をほんの少しだけつけた。パフュームオイルファクトリーの5番がほんのり薫る。コンサート会場のアプリコホールは、ニッセイアロマスクエアに隣接して建てられた。地元では、アプリコホールも含めてアロマスクエアと呼ぶ。直訳すると『香りの園』だ。香水によりパニック障害を発病した僕が、香りの園にて最愛の人とはじめてお会いするとは、想像もしてなかった。神様は一体何を考えていらっしゃるのだろうか。

僕は混雑する道为了避免して住宅街をゆく。偶然、元宮勇気の実家の前まで来てしまい、あの時の苦い思い出が過る。だが、市販の風邪薬を飲んだおかげか、脈は正常通りに脈打っているようだ。最後の信号を渡る前に、コンビニで水とゼリー飲料を買った。演奏中に小腹がすいたとしてもゼリーを飲むくらいならば失礼がないだろう。

コンビニからわずか数分で、大田区民ホール・アプリコに到着した。時計を見る。時刻は、13時45分。琉里ヒメの出番まで、あと15分だ。僕はガラスの自動ドアを抜けてすぐにある階段を2階へ上る。受付係にスマホの電子チケットを見せて、入場した。赤いカーペットの上を係員の指示通りに歩いていく。物販コーナーが設けられていて、琉里ヒメのCDも置いてあった。僕は焦った。物販があるなら、もっと早く家を出てくれれば良かった、と。気の焦りから、トイレに立ち寄ることも忘れ、重いドアを開けホール内へ入った。全て自由席になっているため、僕は一番後ろのピアノ側の席に座った。チャリティーコンサートは初めて参加するが、お客さんが満席に近い状態。大盛況のようだった。時計から時刻を確認すると、そろそろ琉里ヒメの登場も近い。ステージでは、コンサートスタッフが数人、ピアノの調律やカメラチェックなどの作業をしていた。僕は買ってきたミネラルウォーターを一口飲んだ。一呼吸している間に、コンサートスタッフはステージから去っていった。ステージ袖から黒いロングドレスを着た女性が姿をみせた。

「皆さん、こんにちは！ 次のステージは、ジャズ界のビーナス登場です。その美貌と美しく優雅な音色に包まれてください。皆様を、夢の世界へナビゲート致します。ジャズピアニスト、如月琉里」

言ってMCは下がっていった。

真っ赤なオープンショルダーのドレスに身を包んだ如月琉里が登場した。彼女がピアノに座るまでの間、熱烈な拍手が続いた。彼女は観客席に向かって一礼し、ピアノに向かって祈りを捧げた。

琉里はヒメ、サムデイ・マイプリンス・ウイルカムを弾き始めた。この曲の邦題は、いつか王子様が。彼女にとっての王子様になりたい。僕は思った。

琉里ヒメの出番が終わると、僕は早々に席を立った。素晴らしいセットリスト、冷静と情熱の間で揺らぐピアノ演奏、クリスマススペシャルメドレーまで観客を飽きさせない工夫は、さすが日本のトッププロのお仕事だ。この感動の余韻覚めぬうちに、ブログでも書きたい。記事として琉里ヒメと僕の歴史を残しておきたい。

ホールをでた瞬間、長い行列ができていることにすぐ気づいた。回り込んで偵察すると、琉里ヒメが物販にサインしている様子だった。僕の存在に彼女は気づいて、軽く会釈した。SNS越しで見ると、数千倍美しい。いや、世界一かもしれない。僕はわざと時間を潰して、ファンが帰っていく様子を観察していた。サイン会の終了間際になってようやく最後尾に並んだ。

僕は手と額に脂汗をかいている。タオルハンカチで何度も汗をぬぐうがおさまる様子はない。脈拍は速い。ひどく緊張しているのが自分でも解った。列は、一人また一人と消えていく。琉里ヒメへはじめてのご挨拶、運命のカウントダウンは始まっていた。

いよいよ最後のお客さんが帰っていき、サイン会の全貌が明らかになった。

「お待たせしました。何をご所望ですか？」

琉里ヒメのマネージャーがたずねた。白髪とスーツがマッチしてお姫様の執事にも感じる。少しだけ、緊張が和らいだ。

「はじめまして、ファンクラブ会員の柊奎と申します。初めてライブに参加させて頂きました。ですので、勝手が解らなくて……。逆に、何がおすすめてですか？」

僕がマネージャーに質問すると琉里ヒメが口を開いた。

「はじめまして！ 奎さんですよね？ いつもコメントやブログ記事での楽曲紹介ありがとうございます。おすすめは全部なのですが、サイン色紙を買って頂くと、ツーショットお写真が付いてきます。ぜひ、記念にお写真いかがですか？」

言って琉里ヒメは、真珠のような白い歯をみせた。

「はい！ ぜひ、写真お願いします。それと、CDにはサインいただけるのですか？」

「ええ、もちろん！」

琉里ヒメはにこやかに笑った。この世のものとは思えない。天使以外の適切な言葉が見当たらない。

「では、写真集も含めて全部下さい」

僕が財布を取り出そうとすると

「恐れ入りますが、カードは使えませんがよろしかったですか？」

マネージャーは言う。

「大丈夫です」

「では、アルバム4点、写真集2点、サイン色紙の計7点で計算します。少々、お待ちください」
マネージャーが電卓を叩いている間

「お金持ちなんですね」

琉里ヒメは無邪気という

「いえ、実家住まいで恵まれてるだけです」

「ご実家東京ですか？」

「蒲田です」

「えー蒲田なんですか？ 地元なんですね！ 私も蒲田はご縁ある土地でして、昔は南蒲田のライブハウスに出演していました」

「そうなのですね？ 南蒲田は僕の出生地です」

僕が言った瞬間、マネージャーが申し訳なさそうに電卓を提示した。僕は無言でうなずき、物販代金をお支払いする。

「じゃあ、サインしますね！ 宛名はどうされます？」

「ひらがなで、けいくんって書いて下さい」

「かしこまりました」

琉里ヒメはCDにサインしていく。その間に、マネージャーがおつりを返した。本当の家族のようなコンビネーションだ。

「そういえば、今日のコンサートはどうでした？」

琉里ヒメがたずねる。

「いつか王子様がからはじまり、ヒメのオリジナルやクラシックアレンジ、クリスマスメドレーまで大興奮の内容でした。大満足です」

僕は素直にいうと

「姫ってわたしのこと？」

琉里は目を丸くしていった。その可愛さにとろけてしまいそうだった。

「ええ、ブログでも琉里ヒメって呼ばせて頂いてます」

「まあ、奎くんってユニークな人ね」

彼女はクスクス笑う。

「写真集はどの辺にサインします？」

「ヒメの美しいお顔が引き立つような箇所をお願いします」

「もう、奎くんたら」

言って琉里ヒメは僕の二の腕辺りを叩くような仕草をした。宇宙一、可愛い。この人のためだったら、死んでもいいと思えた。琉里は写真集にサインしていく。

「では、写真撮りましょう！」

琉里は一瞬、疲れた顔をみせた。

「あ、写真はまた今度で良いです」

「え、そうなの？」

「ええ」

僕はサインして貰った商品のカバンにしまっていく。

「あの、一つお願いがあるのですが、良いですか？」

「はい、私にできることならなんでも」

「あの、大変恐縮なのですが……」

「いいよ、なんでも言って」

「ファンレターを書いてきました。ぜひ、お時間ある時に、お読み頂けたら嬉しいです」
言って、僕は手書きのファンレターを机に置いた。

「えーめっちゃ嬉しい！ しかもこれ、手書きじゃない？」

「ええ、字が汚かったらすみません……」

「帰ったら絶対に読みます！ 今日は本当にありがとうございます」

「こちらこそありがとうございます。では、また」

「またね、奎くん」

琉里は満面の笑みを浮かべた。その光景を僕は生涯、忘れることはないだろう。

19

19

柊奎様

遅くなりましたが、新年明けましておめでとうございます。
熱いファンレターありがとうございます。

とても、心温まる内容で、読んでいて胸が熱くなりました。

ここまで、私の内面世界を深く理解してくださった方は

奎くんがはじめてかも知れません。

未来への応援も重ねて御礼申し上げます。

小説家の卵とご謙遜されていましたが

奎くんはもう立派な小説家です。

これからも胸を張って挑戦を続けて欲しいです。

さて、ファンクラブにも身内の誰にも話していませんが

私は今年の6月、アメリカへ武者修行に行く予定です。

奎くんからの熱いメッセージを読んで決意しました。

でも、正直言って怖いです。

アメリカは銃社会ですし、最近でもテロがありました。

現在の社会情勢からしてもとても緊迫した様子が伺えます。

生きて帰って来れるのか？

とっても不安に感じています。

もし、奎くんが私と一緒に、アメリカへ来れるようでしたら

私のメッセージに連絡を下さい。

こんなこと言うのは恥ずかしいですが素直に言います。

実は、奎くんがはじめてファンクラブに入会してくれた時から

赤の他人という気がしませんでした。

私はジャズピアニストにも関わらず

アニソンや歌謡曲をテレビやラジオで弾いていました。

そのような迷い多い時期に

奎くんはきちんとジャズ曲をリクエストしてくれました。

そのお陰で、私は今年こそ

オーセンティックなジャズ活動に邁進する決意ができました。

心から、感謝しています。いつもありがとうございます！

最後になりますが

アメリカ行きを前向きに検討してくださったら幸いです。

奎くんのご多幸、健康長寿、更なる飛躍を

心よりお祈りしています。

2024年1月吉日 如月琉里

琉里からの突然の手紙が届いたのは、一月の上旬だった。まさか、出会って間もない琉里からアメリカ旅に誘われるとは思ってもよらなかった。僕は小躍りしたいくらい驚いたし、感動した。地道に応援してきた良かったと心から思えた。そして、いっぱしの小説家として認知してくれたことが何より嬉しかった。琉里からの手紙を読んだ翌日、僕はパスポートを申請しに、有楽町の東京交通会館向かった。沙耶香からの餞別であるイヤホンをつけて、京浜東北線に乗る。相変わらず電車に乗るのは緊張するが、琉里のアルバムが魔法をかけてくれた。パスポートの申請は、かなり混雑していて待たされたが、難なく取得することができた。

東京交通会館を出る頃には、あたりはすっかり暗くなっていて、サラリーマンの帰宅ラッシュの光景を

目の当たりにした。

メンタルの調子が良いので、銀座の喫茶店でお茶をしている時、琉里からメッセージが届いた。

V 奎くん、こんばんは！ 私はいまお茶の水にいます。お時間あればお茶しませんか？

V 琉里ちゃんこんばんは！ 僕は銀座にいます。ぜひ、お茶しましょう！ お茶の水にむかえばいいですか？

V 雰囲気が良いので銀座にしましょう。

V 了解です。移動は電車ですか？ タクシーですか？

もし、電車なら駅までお迎えにあげます。

V 遅いからタクシーにします。

それに、奎くんに早く逢いたいし……

V わかりました。着いたらご連絡下さい。

僕も琉里ちゃんに早く逢いたいです。

V ありがとう♪

では、これから向かいます。

V 世界で一番、大切なお体です。

琉里ちゃん健康と無事故を祈っています。

20

20

銀座四丁目の交差点近く、老舗のジャズ喫茶で僕たちは落ち合った。瑠璃は、キャスケットを目深に被り、黒縁メガネにマスクという完全防備だったが、溢れ出るオーラまでは隠せていなかった。

僕たちは、アメリカ行きの具体的な日程やビザの話、そして僕のパニック障害が飛行機に耐えられるかといった深い話をした。彼女は僕の病気を「繊細な感性の代償」と言って、肯定してくれた。それだけで僕は救われる思いだった。

一時間ほど経った頃、ふと琉里が窓の外を見つめて言った。

「ねえ、奎くん。少し、場所を変えない？ ここは空気が綺麗すぎて、逆に息が詰まっちゃう」

ジャズの流れる店内に不満があるわけではなさそうだった。彼女はきっと、誰かの視線を気にせずに

呼吸ができる場所を求めていた。

「どこか行きたい場所はありますか？」

「高いところは、気分じゃないな。むしろ、高いものを見上げられる場所がいい」
彼女の理屈っぽいリクエストに、僕は少し考えてから提案した。

「東京タワー。観に行きませんか？ 足元にある芝公園なら人も少ないはずですよ」

「それ素敵！ 採用！」

彼女は少女のように弾んだ声を出した。

僕たちはタクシーを拾い、芝公園へと移動した。

車を降りると、そこには圧倒的な質量の光の塔がそびえ立っていた。冬の澄んだ空気のおかげで、鉄骨の輪郭までが鮮明に夜空に焼き付いている。

増上寺の裏手を抜け、小道に入ると人気はほとんどなくなった。琉里はそこでようやくマスクと眼鏡を外した。冷たい夜風が彼女の艶やかな髪を揺らす。

「わあ……綺麗」

彼女が見上げているのはタワーなのか それともその先にある星空なのか。

「アメリカに行ったら、この景色もしばらくは観れなくなりますね」

僕が言うと琉里は視線を落とし、僕のほうを向いた。

「ねえ、奎くん。私、本当は怖い」

「何がですか？」

「全部。成功できるかどうか、テロも、銃も。……でも、一番怖いのは忘れられること」

日本のジャズ界のトップに君臨する彼女の口から出た言葉は、あまりにも弱弱しかった。

「僕がいます」

無意識に言葉が出ていた。心臓が早鐘を打つ。発作の前兆ではない。これは、恋の鼓動だ。

「僕が、ヒメの歴史を書き残します。世界中が忘れても、僕の小説の中であなたは永遠にピアノを弾き続ける。だから、忘れられることなんてありません」

琉里は目を大きく見開き、それからふわりと微笑んだ。その笑顔は、ステージで見せる「如月琉里」ではなく、ただの一人の女性のものだった。

「……奎くんって、本当に私の王子様かもね」

僕たちは寒さも忘れて、ベンチに並んで座り込んだ。

音楽の話、子供のころの話、未来の話。話題は尽きることがなかった。彼女の吐く白い息が、僕の言葉と混じりあって夜空に溶けていく。

ふと遠くで電車の走る音が途切れたような気がした。静寂が一層深くなる。僕はスマホを取り出し、画面を点灯させた。時刻は午前0時45分。

「あ……」

「どうしたの？」

「すみません、時間を……終電なくなっちゃいました」

蒲田行きの京浜東北線も、目黒方面の地下鉄も、もう終わっている時間だ。彼女をこんな時間まで連れまわしてしまった罪悪感とどうやって帰すべきかという焦燥感。だが、琉里は動じなかった。むしろ、楽しそうに目を細めて、僕のスマホを覗き込んだ。

「本当だ。帰れなくなっちゃったね」

「すぐにタクシー呼びます。目黒ならここからすぐですし」

立ち上がろうとした僕のダウンジャケットの袖を、琉里の細い指が掴んだ。

「ねえ、奎くん」

彼女の声は夜風よりも甘く、そして熱を帯びていた。

「タクシー代、もったいないよ」

「え？」

「始発まで、まだ4時間くらいあるでしょ？ 私、まだ話し足りないの」

彼女は上目使いに僕を見つめる。

「奎くんは、私と一緒に朝を待つの、嫌？」

嫌なはずがない。僕は大きく深呼吸して、震える声で答えた。

「……光栄です」

東京タワーのライトアップが、深夜零時の消灯時間を過ぎても、僕の心の中では赤々と燃えあがっていた。僕たちの長い夜は、まだ始まったばかりだった。

第二部 1

【第二部】

1

2024年6月某日、如月琉里がアメリカへ旅立つ日、柊奎は精神科の病棟にいた。琉里との出会いによりパニック障害を克服した奎だったが、持病の統合失調症が悪化したのだ。冷たい消毒液の匂いが立ち込める白いベッドの上で、奎は天井を見上げていた。タバコが吸いたい。彼は思っ立ち上がり病室をでた。

ナースステーションまで来て、受付の看護師に

「単独散歩お願いします」と奎は言った。

看護師は頷き、ナースステーション内へと招き入ると、ボディチェックを始めた。

「柊さん、お氣をつけていつてらっしゃい」

看護師の氣遣いにも、彼は無表情のままだった。

高原医師の紹介で入院した病院の庭には、色とりどりで鮮やかな薔薇が咲いていた。小学校の校庭のような400メートルトラックがあり、売店もある。奎は売店に立ち寄り、冷たいブラックコーヒーを買った。

空はこれ以上ないくらい晴天。真っ赤な太陽の日差しが少しだけ弱まった。飛行機雲が空に描かれて、昼下がりの午後のブレイクタイムを軽やかに演出していた。琉里も今頃、アメリカ行きの飛行機に乗っているに違いない。奎は琉里に懺悔する思いでいた。タバコに火をつける。ぷかぷかと流れていくタバコの煙の先、シャボン玉が飛んできて一瞬の虹を創った。

座り込んで辺りを観察していると、入院患者同士の恋愛がそこかしこで行われていることに気づいた。愛は永遠のものであるべきだと彼は思った。しかし、琉里の想いに応えられなかった今となっては、『あなたと一緒に乗り越えられる』という、かつてのメッセージすら、遠い過去の美しい夢のように思える。琉里との甘い記憶は、手のひらから零れ落ちる砂のように霞んでいく。

その時、スマホの振動音が不気味なほど大きく響き渡った。藤木花蓮からの着信だった。

「奎くん、今どこにいるの？」

「病院の庭」

「もう、タバコなんか吸っちゃダメじゃない。今はいちばん大事な時期なんだよ？」

「解ってるよ。タバコは今日で卒業だ」

奎は心にもない嘘を述べた。

「ねえ、聞いてほしいことがあるのだけど、いい？」

「どうした？」

「私、今日で仕事辞めたわ」

「これからどうやって生活していくんだ？」

「貯蓄があるからしばらくは大丈夫。そんなことよりも、奎くんの傍にいてあげたいの」

「氣持ちは嬉しいけど……」

「琉里ヒメちゃんのことでしょ？ 氣にしないでいいよ。私は奎くんのソウルメイトとして傍にいたいだけだから」

「そんな都合の良い話、神様が許すかな？」

「許すも許さないも私の意志だもん。それに、人生は神々の演劇。全てのことは意味があると思うわ」

「都合の良い男ですまない」

「いいのよ。異性に助けられる、それが奎くんの人生だと思う」

「今、どこにいるんだ？」

「もしかして、私に会いたくなってきた？」

「純粹に心配してるだけだ」

「何を？」

「自殺でも考えていないかなって」

「そんなことあるわけじゃないじゃない」

「それなら良かった」

「今日の奎くんちょっと変ね。何かあった？」

「いや、何でもない」

「そう。なら良かったわ。あ、それで私はまだ残務整理でクリニックにいるわ。明日からはフリーだから毎日お見舞いに行くね。じゃあ、今日は私と会えなくて寂しいだろうけど、ちゃんと一人で処理するんだよ」

「何を処理するって？」

「決まってるじゃない。あなたのマグナムよ」

「バカ。笑わせるなよ。マグナムってほど誇れたものじゃない」

「ウケる！ ホントに面白いね。奎くんって」

「そういうのいいから」

「じゃあ、今度こそ、またね！」

言って花蓮は通話を終わらせた。

2

2

琉里がアメリカへ旅立ってから数週間経った。奎は相変わらず琉里のことだけを想っていた。彼女のSNSはくまなくチェックしていた。花蓮は連日、病室へと足を運び奎を献身的にサポートしていた。梅雨に入ると通常はメンタルが病むが、彼の精神状態は比較的良好で順調な回復をみせていた。それにより、奎は病室でもスマホの使用許可が下りた。花蓮が見舞いに来た、ある日の昼食の時間。

「奎くん、今日は凄いの買って来たよ！」

「なんだ？」

「目を閉じて手を出してみて」

奎は花蓮のいうがまま瞳を閉じて手を差し出した。

「開けていいよ」

奎は瞳を開ける。手に持たされたのは、ケンタッキーフライドチキンの袋だった。

「おいおい、ここは病院だぞ？ これから飯って時に……」

「大丈夫だよ。看護師さんには説明しといたから。それにせっかく個室なのだから、これくらい別にい

いでしょ？」

「……。まあ、そうだな。わざわざありがとう」

「お安い御用だよ」

僕は袋から箱を取り出した。

「一緒に食うだろ？」

「あ、私は後でビスケットだけ貰えればそれでいいよ。お肉は食べれるだけ食べて」

箱にはオリジナルチキンが4つも入っている。ひとりでは食べきれぬ量ではなかった。

「ゆっくり食べてね」

言って花蓮は花瓶の水を替えて席を立った。奎はむしろぼりつくようにチキンを頬張る。手は油まみれだが、言葉にしがたいほど美味い。やはり病院食だけでは物足りないことを実感する。2本目のチキンに手を伸ばす時、奎のスマホがピコンと鳴ったが気にせず彼は食べ続けた。

「だいぶ食欲戻ってきたみたいね」

花瓶を床頭台に置いて花蓮は椅子に座った。最愛のわが子を見つめるような瞳で奎の傍にいた。花蓮は奎のスマホが光っていることに気づいた。画面には、【如月琉里からの新規投稿】と表示されていた。花蓮は自らのスマホで如月琉里を検索し投稿内容を見た。

「ちょっと奎くん、これ……」

「ん？ どうした？」

「琉里ヒメちゃんの新規投稿……」

「ああ、無事にアメリカ着いて、うまくやってるみたいだよな」

「そうじゃなくて……」

言いかけて花蓮はやめた。きっと奎は琉里の投稿を読んだら深く傷つくだろう。花蓮はそっとおくことにした。

「奎くん、ちょっと用事思い出したから、また明日くるね」

言って花蓮は席を立った。

「おい、ビスケット食わなくていいのかよ？ おいったら……」

奎の静止を聞かなかったことにして、花蓮は病室を出ていった。

「まったく、自由人は羨ましいな」

奎は呑気なまでに独り言を呟いた。

ケンタッキーの差し入れをデザートまで食べ終えると、特別やることもなくスマホを手にした。

画面には【如月琉里からの新規投稿】とある。

「あれ、琉里のやつ。何かあったのか？」

奎は、スマホからSNSを開いた。そこで彼は信じられない投稿を目のあたりにする。

数日前から琉里が頻繁に更新していたインスタグラムの投稿が表示された。煌めく飛行機の中からの眼下の景色、見知らぬ異国の街並みが絵画のように切り取られ、そして……そのスクロールの先に、彼の心臓を鷲掴みにする一枚の写真があった。

目を疑うような、いや、背けたくなるような一枚の写真。

琉里と見知らぬ、しかしあまりにも堂々とした体格の男性が、まるで恋人のように肌を寄せ合って満面の笑みで写っていた。男性は琉里の腰に腕を回し、琉里は彼の肩に顔を少し傾けている。二人の間には、説明もいらないほど親密で甘い空気が流れ、何よりも奎の胸を締め付けたのは、その男性が「プロモーターX」として業界では名を知らぬ者はいないほどのカリスマ的スターだという事実だった。写真に添えられた短文には

『最高のパートナーと最高の瞬間』

と、何の躊躇いもなく記されていた。

奎の呼吸が乱れた。喉を鋭い刃物で締め付けられるような感覚に襲われる。意の底から込み上げてくるような吐き気を催す激しい感情が、彼の胸郭の奥底を埋め尽くした。これは、これまで彼を苦しめてきたパニック発作とは違う。もっと深く、もっとおぞましく、魂の根幹を揺るがすような、純粋な痛みと怒りだった。

憎しみ。

あの澄んだ瞳、天使のような笑顔、そして共に困難を乗り越え、共に未来を築き上げようと誓ったあの日々――それら全てが、一瞬にして裏切りの色に染まる瞬間だった。病に蝕まれた心身を引きずりながらも、

『アメリカへ行こう、琉里の傍で支えよう』

と、決心した彼のけなげな気持ちは、今、彼を嗤い、嘲笑しているかのようだった。彼のパニック発作を「繊細な感性の代償」と肯定し、彼の心を深く理解していたはずの琉里が、今、遠い異国で、彼の知らない別の男性と「最高のパートナー」を演じているかのようだ。その現実が、彼の心臓を潰しにかかる。

奎はスマートフォンを乱暴に布団に投げつけた。しかし、震える手でそれを拾うと、怒りの籠った指先で必死に操作した。

琉里の全てのSNSアカウント。

過去の輝かしい投稿、次のライブを告知する動画、美しく鍵盤を奏でる彼女の指先が移る映像。ひつつ残らずフォローを解除した。ファンクラブの退会手続きも、即座に、衝動的に行った。彼の人生から、琉里という存在を、その痕跡の全てを、徹底的に消し去るために。それは、病に侵された患部を、自らの手で切り離すような、痛みを伴う行為だった。

琉里への、そして何よりも、こんな愚かな女を信じ続けた自分自身への激しい憎しみが、心臓を冷たい水でがんにがらめに縛り付けた。

あの東京タワーの下での約束も、あの甘く密やかな夜の囁きも、全てが幻だったのだ。あの時、琉里が彼の胸の中に顔をうずめて囁いた「私、本当は怖い」という言葉も、今となっては別の、おぞましい言葉に聞こえた。彼は、ただ利用されただけだったのか。才能ある彼女の精神的な脆弱さを埋め合わせるための、一時的な道具に過ぎなかったのか。

病室の窓には、残酷なほど抜けるような青空が広がっていた。あの空の向こうで、琉里はいま、一体何を感じているのだろう。彼の心には、何もかもが焼き尽くされた後の冷たい静寂だけが残った。そして、彼は、二度と、琉里の音楽を聴くことはないだろうと、乾いた唇の中で静かに誓った。

奎の琉里への想いが憎悪と変わり、それを完全に忘れるには、新たなる恋愛をする必要があった。だが、傷は癒えぬまま、悪戯に時間だけが経過していった。花蓮は献身的に奎をサポートし、ケンカ別れた柚子とも元通りの姉弟関係を築きつつあった。奎の持病は安定期を迎え、外泊の許可も下りた。外泊が成功に終われば、退院の方向で調整を進めると主治医は言った。奎は蒲田での外泊のため、世田谷区上北沢の病院からタクシーに乗った。

奎は単身、蒲田へ帰ってくると懐かしさと共に安堵の気持ちを覚えた。郷愁の念がひしひしと込み上げてくる。あの頃とは変わってしまった街並みに、変わらない何かを探していた。

その頃、柊家では柚子と花蓮が奎の帰りを待っていた。彼女たちは、奎のお見舞いの際に出会い、すっかり意気投合してしまった。今では、柚子がおねえちゃんて花蓮が年の離れた妹という義姉妹の関係性になった。

奎は自宅のドアを開ける。すると、真っ先に花蓮が玄関にて出迎えた。

「お帰り！ 待ってたよ。今日はパーティーだね」

「花蓮はいつだってパーティーのことしか頭にないんだな」

皮肉交じりに奎は言って苦笑いを浮かべた。

「お帰りの。娑婆の空気はどう？」

後からやってきた柚子が言う。

「人を囚人みたく言うなよ。何の罪だよ？」

奎が言う

「私の心を盗んだ罪よ」

花蓮が言って3人は大爆笑した。

ダイニングキッチンには、柚子と花蓮が用意したご馳走が並べられていた。メインディッシュは、花蓮のリクエストで焼き焼きだった。彼女は、亡き母親が作る焼きの味が忘れられず、というよりも一家団欒で囲んだ焼きの楽しさを味わいたくて、柚子に無理を言って鉄鍋などをお借りした。花蓮は奎のために料理教室にも通った。その真心は、奎の心を動かすのに十分すぎた。

「さあ、食べよう！」

奎はとても腹を空かせていた。

「その前に、乾杯でしょ？」

柚子は伝統を重んじる性格をしている。悪きなく言った。

「まあ、いいじゃない。さあ、奎くん。いまからお肉焼くから、オードブルでもつまんで」
言って花蓮は鉄鍋に火をつけた。

早めの夕食を食べ終わると、3人はカードゲームをはじめた。花蓮がトランプを持参していて、病み上がりの奎には優しい遊びが良いだろうという看護師ならではの配慮だった。トランプゲームの大貧民が熱く繰り広げられていく。

「はい、また奎の負けね!」

言って柚子が高笑いをする。

「超、よわっ」

花蓮が合いの手をいれる。

「だー。もっと面白いゲームないのかよ?」

奎はストレスマックスで言い放った。

「じゃあ野球拳なんてどう?」

花蓮がにやにやしながら言う。

「野球拳! 渋いねえ。あなた本当に20代?」

柚子が言う。

「まあいちおう。っても、そろそろ三十路ですけど」

「柚子の裸は見飽きてるけど、花蓮のはちょっとみてみたいかな」

奎はユーモアを込めて言ったつもりだったが

「スケベ! 変態。エロエロ王子」

なぜか言い出しっぺの花蓮が恥じらいを込めて言った。

「まあまあ、奎くん。物事には順序ってものがあるでしょ?」

柚子がいうと花蓮は「うんうん」と激しく同意する。

「冗談に決まってるだろ」

と言いながら奎は王様ゲームがやりたかった。

「あ、もうこんな時間。ヤバイ帰らなきゃ!」

花蓮が言う。

「なんか予定あったの?」

奎が言う

「ちよっちね」

花蓮はウィンクしてごまかす

「気を付けて帰ってね」

柚子が言って花蓮はカバンを持って出ていった。

残された柚子と奎は、通常通りのテンションに戻った。

残された奎と柚子は、チータラをむしゃむしゃ食べながらコーラやサワーを飲んでた。思い出したかのように奎が口を開く。

「あの時の花……」

「花？」

「ああ、高原クリニックに飾られていたっていう花」

「それがどうしたの？」

「あれ、持ってきたの柚子だろ？」

「知らないよ、私」

「ごまかしても無駄だよ」

「本当に知らないって。横浜のおねえさんだよ、きっと」

柚子は何かを隠そうとしている。奎は疑いの眼差しを向けた。

「じゃあ、これは一体どう説明するんだ？」

奎が差し出したのはレシートだった。

「これは柚子の部屋に落ちていたものだ」

さらに奎は追い打ちをかける。

「……」

柚子は無言を貫く。

「水臭いじゃないか。お花をくれたことは素直に感謝しているよ。でも、僕がカンに障るのは、柚子が秘密にしていることだよ。お見舞いに来てくれたなら、素直にそう言ってくれればいいじゃん」

奎が言うと柚子は

「ごめん」

素直に謝った。

「でも、悪気はないんだよ。奎とおねえさんが仲直りするきっかけになればいいなと思って……」

柚子はようやく白状した。

「はあ。またその話か」

「大事な話じゃない」

「悪いけれど、家族には家族しか解らない事情があるんだ。柚子は家族みtainな存在だけど、やっぱり

血を分けた実の姉とは和解できないよ」

「遺産相続のこと？」

「ああ。あの人はこの家売りたがっている」

「ホントなの？」

「間違いない、僕を追い出して売りに出したいだろうね。こんなオンボロマンションでも、資産価値は数千万円もする。いち早く現金化して老後資金にプールしておきたいだろうよ」

「それって、奎の思い違いじゃない？ 私、おねえさんと直接お話ししたけど、そんな人にはとても思えない」

「いや、柚子の観察力不足だよ。まあ、こんな話はよそう。変な話してすまなかった」

「でも、この際だからはっきり言っとくけど、花蓮ちゃんには気を付けたほうがいいよ？」

「花蓮に？ なぜ？」

「あの子の生まれ育った境遇知らないでしょ？」

「簡単には聞いた」

「じゃあ女優の卵だってことも？」

「花蓮が女優の卵？」

「ええ」

「初めて聞いたな。それ本当なのか？」

「こんなこと言いたくないけど、お金のためだったらなんでもやるタイプだと私は見抜いてる。だから、気を付けたほうがいい」

「柚子、いい加減にしないと怒るぞ？」

「はいはい。また始まったね。おばあちゃんは黙りますよ」

言って柚子は身支度をはじめた。

「奎、最後にこれだけは言っておく」

「なんだよ？」

「人生は長いようであつという間よ。それこそ、夢をみているようなもの。宇宙からしたら、人の一生なんてほんの瞬きするくらいのものよ」

柚子はサマーカーディガンを羽織ってカバンを持った。

「だから、本当に好きな人と結ばれてほしい」

柚子はこれまでにない真剣な面持ちで言った

「別に、花蓮だって好きだよ」

奎は自分の日本語がおかしいことに気づかなかった。柚子は確信した。

「あなたが本当に愛しているのは、琉里さんだけ」

言って柚子は部屋を出ていった。

7月某日、奎と花蓮はデートに出かけた。誘ったのは奎のほうだった。5時近いというのに、夏の日差しが灼けるほど熱い。奎はレイバンのサングラスをかけた。真っ赤なポロシャツに白いハーフパンツ、足元はレザーのサンダルを履いた。白いGショックはサッカー好きな彼のこだわりでもある。花蓮は、花柄のワンピースに小麦色のサンダルを履いてきた。金髪のカツラは被らずに、黒髪のボブを手でかき分けると、シルバーのイヤリングが輝いていた。ほんのりオイル香水の香りがしていた。

奎がデート場所を選んだ遊園地は、彼が中学生の頃か、はじめてお付き合いした彼女とも行ったことがあるか記憶が曖昧だった。窓口でチケットを購入し、花蓮の手を引いていざ入園するとき、あやしい人物が入口付近で僕らを待ち構えていた。

「あら、奎くんじゃない！ 花蓮ちゃんも一緒だったのね？ こんなところで会うなんて奇遇！ 私、ここでバイトしてるのよ。もっとも、単発バイトだけだね。じゃあ、二人とも今日という日を目いっぱい楽しんでね」

ワンダーランド東京の制服を着た柚子が言った。やれやれ、奎は思った。花蓮は恥ずかしさのあまり奎とつないだ手を離れた。

『演じきって』

柚子は花蓮にだけ聞こえるように耳もとに囁いた。そして、ウィンクして去っていった。二人は突然の柚子の登場に動揺したが、すぐに笑顔を取り繕いゲートをくぐった。

「奎くん、絶叫マシーン好き？」

「昔は好きだった。同じ絶叫マシーンに何度もループして乗ったなあ。今は、ちょっと久しぶりすぎて失神しちゃうかも」

「やだあー。奎くんたら。次、入院してももうお見舞いには行かないからね」

言って花蓮は微笑んだ。

「じゃあ、鏡の迷宮でも行ってみよう」

「いいねえ。私、あれ好きだよ」

二人は長い行列を並んだ甲斐あって、人気アトラクションの【鏡の迷宮】に入場した。

鏡に映る無数の自分たちに戸惑いながらも、しっかりと手と手を握るなど二人の距離は親密さを増す。アトラクションも終盤になると、いよいよシリアスさを増し、二人は恐怖の旋律に怯えつつあった。花蓮がふいに奎の腕に抱きつく。その際、花蓮の胸が奎の腕に当たり、奎は性的な興奮を覚えた。このまま今日は無事に無傷で帰れるだろうか、と奎は心配した。二人のラブ度が増していく中、不思議な声が場内に響いた。

「花蓮ちゃん、あなた、本当に奎くんを愛しているの？ それとも、これはただの『役』？」

聞きなれた声は、柚子の声に瓜二つだった。

「鏡は真実を映し出すわ。奎くんの心の中には、まだ『あの人』がいるってね」

声が途切れると、鏡の向こうから一瞬、琉里の幻影が見えた気がした。花蓮は、焦って奎の手を強く握りしめた。

「なんだか不思議なアトラクションだったね」

花蓮が言う。

「うん。なんか名前を呼ばれた気がしたけど気のせいかな？」

奎は不思議がって言った。

「柚子さんの悪戯にしては巧妙すぎるし、やっぱり気のせいじゃないかな。気にせず、つぎ行こう！」

二人は手をつないで園内を散策していた。奎は、すでに恋人のような雰囲気には酔っていた。ワゴンの売店を目の当たりにして奎のお腹が鳴る。

「ねえ。スモークチキンか、チュロス食べていかない？」

「私はチュロスがいいな。でも、一人で全部は食べきれないから半分こしない？」

「そうだね。じゃあ買って来るから、そのテーブルで待ってて」

「あ、私は飲み物を買って来るよ。コーラでいい？」

「今日はオレンジジュースでも飲もうかな」

「オレンジね。じゃあここで待ち合わせしましょ」

言って花蓮は自動販売機へ向かった。

奎は、チュロスのワゴンの前で順番を待っていた。その時、後ろから肩を叩かれた気がして彼は振り返った。

「オニィさん。忘れ物だよ」

振り返ると私服に着替えた柚子だった。

「うわっ！ びっくりした。柚子か」

奎が言うと柚子は無言で手紙のようなものを差し出した。

「花蓮ちゃんと別れたら、ちゃんと読んでね」

言って柚子は人込みをかき分けて消えていった。

奎はその手紙をジーンズのバックポケットにしまった。チュロス売り場のおねえさんが「次のお客様、どうぞ」といった声で正気に戻った。ココア味のチュロスを一本買って待ち合わせ場所に戻る。

「いやあ、お待たせ。待った甲斐あってめっちゃ美味しそうだよ」

奎は無邪気に言った。

「ありがとう！ はい、オレンジジュース」

言って花蓮はジュースを手渡した。

太陽は沈み、うっすらお月様が見え隠れする夕食時のワンダーランド東京。家族連れはとくに少数派になり、残されたのはカップルやグループデートの男女、外国人。特に、お手洗いで様々な言語が

飛び交っていた。安くなった日本に魅力を感じているだろう。

夢の時間はあっという間に過ぎて、潮風が服と少しだけ肌寒い。奎は、腰に巻いたサマーカーディガンを花蓮の背中にかける。

「ありがとう……」

「冷えは美容の大敵だからね」

言って奎は花蓮の腰に手をまわした。刹那、琉里とプロモーターXの2ショット写真のことを思い出し、さらに強く花蓮を引き寄せた。今頃、琉里はベッドで喘いでいる最中かもしれない。そう思うと奎は、正気ではいられなかった。愛憎が交差する、夜のメリーゴーランド。奎の心境はまさにそれだった。

「奎くん。そろそろお別れの時間だね」

観覧車の時計をみながら花蓮が言う。

「今日は本当に楽しかったよ」

「ねえ……」

言って花蓮は瞳を閉じた。

奎は真正面から花蓮を抱き寄せた。頭をぼんぼんとして、すぐにその体を離れた。

「どうして？」

花蓮は期待外れの表情をした。女心に鈍い奎でも、本当は気づいている。花蓮が望んでいたのはお別れの口づけだろう。

「僕はまだ、世間から小説家として認知されていない。経済的にも完全に、家族に依存している。つまり、今はどんな魅力的な女性から好意を寄せられたとしても、お付き合いはできない。今の僕には恋愛する権利はないんだよ」

言って奎は星空を見つめた。蝉のなき声が聞こえていた。短い生命と感じながらも、必死の求愛行動がとれる蝉が羨ましいと奎は思った。食物連鎖の頂点に立つホモサピエンスの一人として、最後の理性が働いたとは思えない。それくらい、今夜の花蓮は魅力的だった。

6

6

2024年8月26日、東京都大田区蒲田、曇り時々晴れ。奎は自身の誕生日前日に、柚子の誘いを断って、当日は花蓮を誘う予定で準備していた。いそいそとスーパーへ買い出しに行ったり、髪の毛を

切りに行ったりと、年末のように慌ただしく過ごしていた。

奎は美容室の帰りに、駅ビルに立ち寄り、お気に入りのケーキ屋さんで苺のショートとチョコレートケーキを買った。深い意味はない。マザーテレサの誕生日には、毎年ひとりでお祝いをすることにしていた。柚子は、奎のことをきかけながらも、小説の新人賞の締め切りが8月の末日なので、最後の追い込みをかけることに全精力を注いでいた。

奎は珍しく夕食を外で食べた。お金がないわけではないが、無限にあるわけでもない。主だった仕事をしていない彼にとって、外食とは無駄使いの王道に属する。令和の時代、ラーメン一つとってみても、外で食べるのと家で作るのとそんな大差があるわけではないと思っていた。だが、皮肉なことに、今日食べたラーメンは、この世に2つとして同じものはないと断言できるほど、独創的でかつ繊細な味付けで美味かった。スープも飲み干した。

満腹になった彼は自宅に戻ると、虚しさに襲われた。その正体は解らない。明日には年を一つ重ねることになる。老いの憂鬱なのか、それとも、今でもまだ……。

奎は風呂に入って早々に寝ることにした。花蓮には明日電話すればいい。きっと明日はこの心も晴れるだろう。

バスタブにお湯を貯めている間、奎は歯を磨いていた。磨きながら、テレパシーの有無について考えを巡らせる。もし本当にテレパシーが存在するならば、運命の人と心通じ合える関係になりたい。だが、その想いは脆くも崩れ去った。彼の統合失調症の主な症状は、被害妄想と幻聴だが、陽性症状の幻聴は滅多に起きず被害妄想もどこからどこまでが本当の被害なのか、医者でも見解が解れる。

ただし、高原医師だけは、彼の桁外れた想像力について、面白い！ との見解を示し、文章力を磨くよう、再三アドバイスしていた。

奎はお湯を止めて、服を脱ぎ、湯船に浸かった。

今ならば、許せる気がしていた。琉里のことを。ただ、嫉妬深く頑固な彼女が、自分のことを許すはずがないと思っていた。それは、彼女のブログ記事から勝手に感じ取ったことだが、あながち外れてはいないと思う。奎は、小説のキャラクターを創る時、占いを使用している。その占いによれば、琉里は誰とも仲良く接することができない才能があり、弁舌に巧で、他者からの強力な引き立てにより成功する星を持っている。現実に合わせて言えば、プロモーターXとの出会いがそれに該当するだろう。悔しいが、あの男にだけは何一つ敵わない。唯一、勝てるとしたら、琉里への想いの強さだったはずだが、ファンクラブから逃げた今となっては、その想いすら偽物だったのかもしれない。奎は過去を顧みて、うなだれた。

あの日以来、奎は音楽を聴かないことにしていたが、幼馴染の元宮勇気のアルバムをかけた。声が聴きたかったからだ。

こうして元宮の音楽を聴いていると、ある言葉が脳内に浮かぶ。

『天才』

または、現代における『妙音菩薩』

元宮勇気から聞いた話だが、妙音菩薩とは、仏教の始祖・釈迦の亡きあとに、法華経を広めるリーダーの一人。宇宙のリズムを音楽というツールを用いて、人々を教化する姿が仏典に描かれているらしい。ま

さに元宮勇気も、音楽家という名を体した菩薩であり、仏なのだ。比べるものではないが、琉里はジャズ界の天才と評されることがある。彼女がもし、商業主義に染まらず、生粋の芸術家として生きて行けたならば、この身を焼いてでも、どのような誹謗中傷を受けようとも、この心を捧げる決意だった。今は、夢か幻、シャボン玉のように弾けて飛んだ、儚き影。

奎は、すっかりいい気分になって、少しのぼせていた。身体の芯から温まった後は、クーラーの風量を全開にして、確かな幸せを実感していた。パジャマ代わりのスウェットに着替え、髪の毛を乾かし、あとは、眠り薬のココアを飲んで歯を磨きなおして寝るだけだった。眠りに就くまでの1日で最も幸福な時間を贅沢に過ごしていた。

インターフォンが鳴り響いた。

奎は虚ろな目でモニターを確認する。瞬間、眠気が一気に吹き飛んだ。黒のブーツとレザーのパンツ、ピンク色の半そでニット姿の女性がうつむき加減で立ち尽くしていた。

「奎くん……。お願い、出て……」

見上げた顔は、アメリカへ旅立ったはずの如月琉里だった。

7

7

奎は戸惑いながらも、琉里を部屋に招き入れた。尋常ではない様子を感じ取ったからだ。琉里は、胸元のあいたピンクのニットからブラジャーの紐がみえていることにも気づいていなかった。奎はジェスチャーで伝えると、琉里は恥ずかし気にブラ紐を直した。

「まあ、なんもない家だけど、奥にソファアあるから適当に座ってて」

奎が言うところ琉里は「はい」といった。他人行儀な態度に奎は少し苛立った。琉里がリビングへ向かうのを見て、奎はドリップ式コーヒーをいれる。

カウンターキッチン越しに

「今日はどうしたの？」

奎はたずねた。

「……。ちょっと色々あって」

元気なく琉里は言う。アメリカで何か問題でもあっただろうか。奎はドリップ式コーヒーに注いだお湯が早く落ちるようにと祈った。

「甘い食べる？」

彼なりの精一杯の配慮だった。

「お構いなく……」

言って琉里はうつむいた。

奎はサーフボード型のリビングテーブルにコーヒーを置いた。ミルクと砂糖を運び終わると、琉里の隣に座った。

「琉里、本当にどうしたの？ アメリカで何かあった？」

奎は赤子に話しかけるよりも丁寧に聞いた。

「聞きたいのは私の方だよ。奎くん。なんで、電話にもメールにも返事くれなかったの？」

琉里は堪えていた涙を流した。

「なんでって、向こうでできたんでしょ？」

「できたって何が？」

「新しい恋人」

「え？」

「インスタ見たよ。随分、親しいみたいじゃん。肌と肌を寄せ合ってさ。おっぱいなんか男の体に当たったりして」

「ちょっと待ってよ。何の話？」

「プロモーターXさんだっけ？ 業界では随分名の知れたスターみたいだけど、僕は知ったこっちゃないね。長いものに巻かれる的な発想、いちばん嫌いなんだ」

奎は感情を露わにした。本音を言えて、久しぶりにすかつとした気分だ。

「もしかして、倉木さんのこと？」

「琉里の恋人の名前なんて僕が知るわけじゃない。僕が知るのは、プロモーターXって事実だけ」

「奎くん何か勘違いしてるよ。私、衣装や普段着でもラフな格好してるから誤解されやすいけど、そんなに軽い女じゃないよ」

「別にいいじゃない。琉里はいい人探し中でフリーなんだし、誰と寝ようが僕には関係ないよ」

「そんな風に思っていたのね。だから、ファンクラブからいなくなったのね？」

「……。琉里とは運命の人だと信じてた。一寸の迷いなく愛してた。それは事実だよ。だけど、琉里にとって僕はファンの一人。そのことが今回の件でよくわかったよ」

「奎くん。お願いだから少し落ち着いて。今から、本当のことをお話するから……。それでも誤解が解けなかったら、私、ピアノやめてもいい」

琉里は真剣な目つきで言った。ステージ上で見せる目と同じ、大きなたれ目の奥に宿る凜とした灯がゆらゆらと輝いていた。

「……。わかった。ここからは黙って聞くよ」

奎はホットコーヒーにミルクを入れてかき混ぜた。

しばらくの沈黙のあと、琉里は重い口を開いた。

「奎くんが誤解するのも無理はないわ。指摘した人物はたぶん倉木すばるさんのことだと思う。彼は、プロモーターXと呼ばれているかはわからないけれども、業界では伝説のプロモーターよ」

言って琉里は写真を提示した。奎はそれを見て小さく頷いた。

「奎くん。私ってね、お酒に凄く弱い。正確に言えば、お酒は大好きなんだけど、酔うと何をしでかすか自分でも解らないくらいに、飲まれちゃう体質なの」

琉里は必死にうったえる。奎は冷ややかに聞いている。

「それでね、とあるパーティーにご招待されて、そこで倉木すばるさんを紹介されたの。私はその時点でお酒は飲んでなかったけれど、倉木さんから直々にお酒を進められて……。仕方なく一杯だけ付き合うことにしたの」

琉里は回想しながら涙目になっていた。

「写真を撮ってもらって、文章を書いたのは私本人で間違いないわ。そのことは素直に謝ります。けど、やましいことは何一つない。倉木さんとはビジネスのお付き合いだから、お酒だって断れないこともあるのよ。どうか解って！」

琉里の主張を聞いて腑に落ちない点がひとつあった。

「僕がファンクラブを退会したことはいつ知ったの？」

「すぐに気づいたわ。奎くんのアカウントは特別な設定にしてあったから、何か動きがあればお知らせがメールで届く。いなくなったとして、とても悲しかった。しばらくはSNSが怖くて更新できなかった……」

「あの写真を見て勘違いしたのは僕だけではないはずだ。その証拠に、あの日ファンクラブからは大勢の人たちが退会届を出したようだ。なぜなら、サーバーがパンクしてて、なかなか退会が受理されなかったからさ」

「ええ。自分でも軽率な行動だったと反省してる」

「だったら、なぜ？ あの投稿を消さない？」

「それは……」

「倉木すばる。彼の力が君には必要なんだろ？ だから、媚び売ってでも、のし上がるとしたんだろ？」

「……」

「琉里の音楽だけを愛せたならまだ良かった。純粹に君のファンでいられた。けど、君は身も心も美しすぎた。僕は一目で恋に落ちてしまった。気づいたら愛の沼にすっかりハマっていた。アーティストとファンの壁を破れるわけがなかった、僕がバカだった……」

言って奎は腕を組んだ。

「私、奎くんのことファンとして思っていない。だって、奎くんは私の大学の先輩だもの」

「なぜ、僕が慶友だと知っている？」

「高原先生に聞いたわ」

「高原先生に？」

「ええ。私の家族も全員、慶友出身でね。父はいちおう医者なの。高原先生は蒲田では有名な先生だし、慶友病院の医局にいたこともあるから、私の父とも懇意にして下さっていてね。先生は蒲田に面白い子がいるって父に話してたらしいの。その話を聞いてすぐにピンときたわ。ああ、奎くんのことだって」

「慶友なんて昔のことさ。それに僕は中退している」

「中退してても、慶友が好きで入ったんでしょ？」

「まあね」

「今の答えで解った。間違いないわ……」

「何が？」

奎が言った瞬間、琉里が奎に抱きついた。

「奎くん。私をもう2度と離さないで」

奎は突然のことで身動きが取れずにいた。ただ、彼女の精一杯の告白であることは間違いなかった。だが、安易にそれに応えることだけはしなくなかった。

8

8

翌日の早朝、奎は一睡もできず、そのままウォーキングに出かけることにした。琉里はリビングルームの暖かな布団ですやすやと寝ていた。その寝顔は、奎が想像する以上に愛らしく、ファンの間で天使と呼ばれる所以が解る気がした。琉里が起きる前に、朝食を支度しなければならぬ。奎は準備を急ぐ。顔を洗い、髭をそり、歯を磨き、さっとフォームで髪をとかした。上下スウェットの寝巻を脱いで洗濯かごに放り投げる。用意したスポーツウエアに着替えて、準備は整った。リビングで寝ている琉里を起こさぬように、仏壇の前で金は鳴らさず手だけ合わせて出発した。

なんて清々しい朝なのだろうか。あの芝公園での一夜が鮮明に蘇ってくる。二人で手をつないで感動的な朝焼けを観た。昨夜、琉里の想いに応えなかったのは、琉里だけでなく花蓮への最大限の配慮の意味もあった。琉里とは簡単に結ばれてしまったら面白くない。

これだけ、長い間、一人の人を想い続けたことなどなかった。身体だけでつながる関係は結局は破綻する。身をもって経験していた。

奎や琉里は実年齢からすればかなり幼い。未だに高校生みたいな恋愛をしている。だが、それは彼らの特筆すべき才能でもあった。

奎がウォーキングから戻ると、キッチンから良い香りが立ち込めていた。犯人は琉里。奎の胃袋は急激に炭水化物を欲した。ダイエット目的で汗を流した後に、モリモリご飯を食らう。これが、奎の日課であった。

「いい匂いしてるね？」

奎はひょっこりと琉里の後ろから鍋を覗いた。

「奎くん、お帰り」

「何を作ってるの？」

「バターチキンカレーだよ。冷蔵庫に材料あったかから勝手に作っちゃった。ごめんね」

「いいんだよ。僕のは琉里のものなんだから」

「もう、奎くんったら……」

琉里は40を過ぎた奎に対し、無上の可愛さを感じていた。

「お風呂はいつてきていい？」

「うん、いいよ。お風呂からでるくらいには食べれると思う。ゆっくりはいつてきて」

琉里との少しの別れの時間を惜しみながら、奎はお風呂場へと向かった。

朝食が食卓に並べられた。バターチキンカレーにアボカドとトマトのサラダ、そして冷ややつこ。謎にしじみの味噌汁が付いてきた。デザートはパンケーキらしい。和洋折衷の組み合わせにより、琉里の料理のセンスを雄弁に物語っていた。

「さあ、食べよう」

「……。頂きます！」

奎はスタートダッシュが肝心だと思った。琉里の手料理は嬉しい。だが、全て食べきるには、気合と根性があると感じ取った。

奎は、メインのバターチキンカレーを飲み物のように流し込んでいく。そして、しじみの味噌汁でさらに勢いづく。カレーに冷ややつこはいかがなものかと思ったが、案外イケる。というよりも、カレーの辛さを冷ややつこがマイルドにしてくれる。奎は黙々と飯を食らう。琉里は頬に手を当ててにこやかに奎を見つめている。

「奎くん。お腹すいてたんだね？」

「ん？ まあね！」

「私の分も食べていいからね！」

奎は飲んでいたしじみの味噌汁を吹き出しそうになったが、どうにか堪えた。ナチュラル・フード・キラーズ。琉里の裏の顔だ。

「ありがとう！ 美味しすぎて止まらないよ。さあ琉里ちゃんもお食べなさい」

奎は父親のような親しみを込めて言った。

「ありがとう！ でも、私、いまダイエット中なんだよね……」

琉里の発言に奎は心の中でずっこけた。昭和のコントじゃあるまいし、この子は面白すぎる。奎は思った。ほどなくして、用意された食事を奎が全て平らげると、琉里は「凄い！ さすが男の子ですねえ」と言って褒めたたえた。赤ちゃんごっこかと奎は心の中で突っ込みを入れた。

リビングでコーヒーを飲みながら琉里と奎は雑談をする。昨日までの軋轢などなかったかのようだ。

「え？ サントリーホールでコンサート？」

奎は目を丸くして言った。

「うん。来月の20日にね」

琉里は大きな舞台に立つ誇らしさと共に、不安をのぞかせた。

「ちょっと怖いなあ……」

琉里は本音をぼろっと漏らす。

「大丈夫だよ！ 琉里は本番に強いタイプだし、観客は全員、琉里の見方だから。ぜひ、ピアノ演奏を楽しんでね」

「奎くん。このコンサートは全て倉木さんが仕切ってるの。だから奎くん、どうか私を信じてね！ 倉木さんとは仕事上の大切なパートナーに違いないけど、所詮、お仕事だもの。私が本当に大切なのは奎くんだけ。それをサントリーホールで証明するから、楽しみに待っててね」

「わかった。琉里がそこまで言うなら、もう何も言わない。お仕事だもの、これからもお互いに精一杯チャレンジしていこう！」

琉里と奎は、初恋のような甘酸っぱい気持ちでお互いを見つめていた。

9

9

8月末日、プロモーターXこと倉木すばるは、二子多摩川の自宅にいた。現場を見ずに人を動かすのが彼のやり方だった。8画面のデイトレーダー用パソコンモニターには、現場の様子が事細かに映し出されている。木製の机の上に置かれたキーボード一つで、簡単に人の人生を狂わすことも可能である。現在、彼が動かしているプロジェクトは全部で6件。如月琉里のサントリーホール公演は、採算が採れるか不明瞭ではあった。しかし、個人的な趣味の一環として、引き受けることにしたのだ。

「ふふ。今日も働きアリは間違えた方へ進む。バカな奴ら」

倉木すばるは不敵な笑みを浮かべ呟いた。

3回ほどドアのノックする音が響いた。

「入れよ」

入室したのは、元グラビアアイドルで俳優志望の女だった。

「おお、今日はまた随分、エロそうな女をよこしたな」

すばるは椅子ごと女のほうに向けて言った。女は「失礼します」と言って、すばるのジーンパンのボタンを外しファスナーをおろす。女はパンツの上から愛撫していく。そして、パンツをはいた。

「世の中、カネが全てだ。そうだろう？」

すばるは女にむかって言い放った。女は無言でうなずき、行為を続けた。仕事中的彼には絶対に話しかけるな！ と、上司からきつく指導されている。感情を持たないロボットのように、ただいうことを

聞いていればお金をくれる。女にとって、愛とカネはセットだ。

すばるは、一通りの欲を女にぶつけると「チップだ」と言って、女に現金の束を手渡した。

「お楽しみ頂けたようで光栄です」

女は無機質な声で言う。

「今日は久しぶりに興奮した。ありがとな。また、遊びに来いよ」
すばるが商売女に対して懇意にするのは珍しい。

「おい、名前はなんという？」

すばるの質問に対し、女は困惑した。

「名乗るほどの名前をもっていないせん」

女は思慮深く言った。

「じゃあ俺がなずけてやるよ」

腕を組みすばるは言った。

「夏は好きか？」

「はい。好きです」

「エロイことは？」

「大好きです」

「ヨシ！ 決まった」

すばるはぼんっと手を叩いた。

「今日からお前は、金原美枝子だ」

「かねはらみえこ」

「そうだ、美枝子。美しい名前じゃないか。嬉しいか？」

「はい。X先生、とても嬉しいです」

何気ない女の一言にすばるはぶち切れた。

「誰がXじゃ、ボケ！」

すばるは腕を思い切り振りかぶって女の頬を引っ叩いた。

女は身体ごと吹っ飛んだが、すぐに起き上がって

「ありがとうございます」

言って部屋を出ていった。

倉木すばるは、何事もなかったかのように仕事に戻った。

その日の夜、金原美枝子と名付けられた女は、柊家のマンション前にいた。服装は、どこにでもいそうな倉庫作業の女のように、ダボダボのブルージーンズに紫色のトレーナーを着ていた。足元はわざとボロボロのスニーカーを古着屋で調達した。背中にはリュックサックを背負っている。美枝子は、あらかじめ盗んでおいたカードキーでロビーをスマートに侵入する。

エレベーターで最上階まで上り、黒いカーペットの上を足音を立てずに歩いていく。

ターゲットの家の前まで来ると、イレギュラーが発生する。確実に、外出しているという情報により作戦を実行したが、部屋の明かりが付いているのだ。ハメられたか。美枝子は思った。

だが、プロである以上、後には引けない。このタイミングをのがしたら、この後の全ての計画が台無しになるからだ。

美枝子は正面突破を諦めて、屋上へと移動する。

階段を上っていくと屋上のドアに南京錠がかけられていた。美枝子はリュックからピッキング道具を取り出して、南京錠の解除をはじめた。あかない場合は、車からボルトカッターをもってくるか、ドリルでピンメカニズムを破壊する方法が考えられた。だが、従順なまでに南京錠は簡単に解除された。ドアを開けて奥へと進む。

美枝子は、屋上から柊家への侵入ができることを知っていた。しかし、先ほどの明かりの正体が掴めるまでは、油断できない。最悪は、強行突破という手段も考えられなくはない。美枝子は軽く息を整えた。時計を見る。この時間家主は疏里という女の部屋に遊びに行っている。実際、お洒落着で外出していく様子を確認している。女と会っているのは間違いない事実だろう。では、部屋の明かりはなんのために？ 美枝子は様子を伺いながら待つことにした。

美枝子が回収したい【ブツ】はそんなに大きなものではない。この作戦の成功の如何によっては、すばるの寵愛をひとり占めできることもできるし、失敗すれば命の保証はない。盗みのプロとして訓練は受けたが、実務に当たるのは今回がはじめてだ。美枝子はグラビアアイドル時代を思い出す。俗にいう枕営業は当たり前の時代だった。場合によっては、風俗に沈められていった同期たちもいる。ヤクザの女になることは、職場恋愛のようなもの。常にプレッシャーにさらされ、常に危険と隣り合わせ。そんな世界も決して嫌いではなかった。だが、家主のようなお坊ちゃんタイプをみると、それだけで虫唾が走る。個人的な恨みはない。ただ、生理的に無理というだけだ。

美枝子が回想していると、突然、部屋の明かりが消えた。

美枝子は屋上から階段を下りて、柊家の正面玄関の様子をみた。しばらくして、金髪の女が出てきた。情報にはない、第3の女だ。金髪の女が完全に消えたことを確認すると共に、作戦は正面突破に切り替

えた。

素早くカードキーで部屋へ侵入し、リビングルームからブツのありかを探る。少々、荒っぽいやり方だが、時間が押している以上、仕方ない。リビングルームにはめばしいものがなかった。続いて書斎へ向かう。パソコン関連のものをかたっぱしから漁る。机の引き出しからUSBメモリを発見する。それを全て回収して、部屋にあるパソコンを片っ端からすべて壊した。ケーブルも全て切断し終えて、美枝子の任務は終わった。

11

11

「なんだ、これは……」

琉里の家から帰宅した奎は、開口一番そう言った。無残にも引きちぎられたケーブルがあたりこちらに渦巻いていて、パソコンは一台もろとも無事だったものはない。奎の脳裏にある男の名前が浮かんだ。プロモーターX、倉木すばる。やつの仕業だ。

奎は引き出しを開けて愕然とした。

「USBメモリが……」

彼にとって一番の宝物であり、または、最愛の琉里を救う唯一の手段が、何者かによって盗まれた。奎は、力なくその場に座り込んだ。だが、もっと重要なことを思い出して、金庫へ向かった。

「ない……。僕の全財産が……」

奎は絶望に打ちひしがれた。だが、琉里との2ショット写真までは奪われていなかった。彼女との誓いを守るためならば僕は悪魔に魂を売ってもいい。奎は思った。

「琉里は僕を守る」

彼は力強く呟いた。

★

「今から、ですか？」

琉里は目黒の自宅にいて、作曲の構成を練っている最中だった。

「ええ。サントリーホールコンサートの件でどうしても、会ってお話したいことがあります……」

倉木すばるは丁重に言った。

「明日じゃダメなんですか？」

琉里は困惑して言った。

「はい。どうしても、今夜中に片付けなきゃいけなくなりました」

「でも、こんな時間から倉木さんと落ち合える場所なんて、どこあるかしら？」

「そのことでしたら気に病む必要はありません。部下にお迎えに向かわせますので、ぜひ、私の自宅にてお待ちしています」

「それは困ります。私、友人にしか自宅の住所教えてません」

「では、恋人ならば琉里さんの自宅を知っているのですね？」

「はあ？ 私、恋人なんていません」

「柊奎くん、でしたっけ？ 今の発言を彼が聞いたら嘆くと思うな」

「……。なぜ、奎くんを知っているのですか？」

「ああ、面倒くさい。では、単刀直入に言います。あなたは柊奎さんとお付き合いしていますね。その証拠の写真が私の手元にあるんですよ。奎くんがあなたと手を繋いで歩いている写真やマンションから奎くんと二人で出てくるシーン。もっと言えば、抱き合っている写真なんかもあります」

「……。何が言いたいんですか？」

「そうです。その調子です。琉里ヒメと呼ばれるだけのことはありますね」

「バカにしてるんですか？」

「バカになんかしていません。これ以上、話すのも無駄なので要件を言います」

「……。なんですか？」

「今夜、私の一夜妻になりなさい」

すばるは言い放った。

琉里は全身に鳥肌が立つ思いでいた。こんな卑劣な男に抱かれるくらいなら死んだ方がマシだ。

「嫌みたいですね？ なら、仕方ない。この写真は情報と共に、週刊誌に売ります」

「ええ、どうぞお勝手に。こんなことで、私の奎くんへの愛は変わりません」

琉里の愛は昂っていた。

「サントリーホール、楽しみですね。では。……」

すばるは不気味に言い放って通話を切った。

翌日、琉里のマネジメント会社社長が直々に、彼女の家を訪問した。マネージャーも同行していた。琉里は、覚悟を決めた。

「琉里さん。今回の件はわが社始まって以来の大難です。どうしてこのようなことになったのですか？」社長は琉里にたずねた。

「こちらが聞きたいくらいです。なぜ、社長が自宅に来たのか？ さっぱり解りません」

琉里は昨夜のおぞましい出来事を早く忘れたかった。

「柊奎さんとお付き合いしているというのは本当ですか？」

「なぜ、プライベートまで干渉されなきゃならないのですか？」

琉里は正論を言った。

「まあまあ琉里ちゃん。落ち着いて。別に責めてるわけじゃないんだよ。ただ、時期が悪かった。琉里ちゃんは今月大きなコンサートを控えているし、奎くんってのは一般人だろう？ 今、スキャンダルが明るみになったら、うちの会社ごと吹き飛んでどこか消えちゃうよ」

マネージャーが優しさを込めて言う。

「まあ、琉里さん。うちの会社を助けると思って、その……」

社長は言葉濁す。だが、聡明な琉里は言いたいことに気づく。

「嫌です。絶対に、別れたりしませんから」

琉里は感情を抑えるのが苦手だ。しかし、女性目線でいえば、なぜ愛する者同士がお互いの家を行ったり来たりしたくらいでこんなに大々的に騒がれなきゃならないのか。理解に苦しむ。

「琉里ちゃんも40近い大人なのだから、ここは穩便に済ませましょうよ？ ねえ社長？」

マネージャーが琉里の逆鱗に触れるNGワードを言った。

「年は関係ないじゃない！」

琉里の怒りは頂点に達した。

「では、この先に予測される事態についてお話しします。まず、情報を週刊誌にリークされたら、ファンクラブの運営が難しくなるでしょう。ファンは急速に離れ、サントリーホール公演の開催も危ういです。そして、最悪な事態になると、公演中止による違約金をわが社に払って頂く契約になっています」

社長は冷静に説明をした。

「違約金って幾らですか？」

琉里は少し震えながら聞いた。

社長はマネージャーに電卓を叩かせる。

すべての計算が終わると社長に数字をみせた。

「違約金は、ざっと換算して約一億円です」

社長は短く言った。

「……」

琉里は言葉に詰まる。

「これが最後の通告です。奎さんと別れてください。あなたのピアノ人生に彼は必要ですか？ 一億円ですよ？ 本当に厄介者だ」

言って社長は席を立った。

「明日までに返事を下さい。良い返事をお待ちしています」
彼は去り際にそう付け加えた。

「じゃあ琉里ちゃん、ピアノ練習頑張って！」

マネージャーも席を立つのを琉里は待っていた。

「私、絶対に別れませんから！」

そのセリフは琉里の奥底に深く響いた。

13

13

それから2日後、週刊誌にはいち早く琉里と奎の記事が掲載され、各新聞社も大々的に二人の熱愛を報じた。

超人気！ ジャズピアニストに熱愛発覚！

エロすぎるジャズピアニストとして

数年前に鮮烈デビューした

如月琉里の熱愛が発覚しました。

気になるお相手は、一般の方で現在無職
小説家志望のイケメン男性のようです。

如月琉里は圧倒的に男性ファンが多く

今回の熱愛報道により

急速なファン離れが起きると

予測されています。

彼女は、今月20日に

サントリーホールで

コンサートを開催する予定でしたが

今回の報道を受け

チケットの払い戻しのお問い合わせが
殺到しているようです。

今後は、ファンクラブ運営も
厳しくなると予測されており
まさに、万事休す。

いっそのこと

グラビアアイドルとして

振り切った方が良いのでは？

という専門家の意見もあります。

今後、如月琉里の最新情報を

いち早くお届けしていきます。

週刊誌の予測通り、琉里のファンは急速に離れていった。琉里の事務所は、この事態を重く見て、ファンクラブを完全閉鎖した。そして、琉里との業務提携の契約も一方的に解除した。何よりも琉里の胸を締め付けたのは、ずっと憧れだったサントリーホールでのコンサートが中止の運びになったことだ。
琉里は奎の自宅に身を寄せていた。尾崎豊の『アイラブユー』の歌詞みたいに、何もかもが許された恋ではなかったのかもしれない。いまは二人静かに再起の時を待つ。世界中の全てを敵に回したとしてもこの愛を貫くという心境だった。

14

14

傷心の二人は、柚子が所有する葉山の別荘に招かれた。今の二人にとって車の運転は危険だという柚子の判断のもと、しばらくは柚子が身の回りの世話をすることになった。

「さあ、お二人さん！ 今日美味しいお魚を買ってきたよ」

柚子が元気よく言う。

「柚子さん、いつもすみません……」

琉里が言うと

「いいのよ。琉里ちゃんは将来、奎の奥さんになるんだから、私にとっても家族だよ」
からっとして柚子は言う。

「柚子、それなんの魚？」

奎は純粹な好奇心からきいた。

「嫌だねえ最近の若者は……アジも知らないなんてねえ」

柚子は首を左右に振った。

「アジって開いてるやつしか見たことないもん」
奎が言うと

「実は私です」

琉里が言って三人は大爆笑した。

「昼ごはん食べ終わったら、葉山港連れてってあげるね」

柚子が言って海好きの琉里は大興奮の様子だった。

柚子の運転する車の中で、琉里と奎はずっと手を繋いでいた。言葉にしなくても分かり合えるような感覚が二人にはあった。いつだったか奎が、高原医師から聞かれたテレパシーの有無についても、今だったらあると彼は胸を張って言えると思った。

「ほら着いたよ！ 起きてー」

柚子の声とともに奎は目覚めた。気づけば葉山港だった。琉里はすでに車から降りて海岸線沿いを裸足で歩いていた。「ねえ、お二人さん。もし気に入ったならっどディープな私のお気にいりのスポットに連れてってげるわ」

柚子が言うと二人は揃って「はい！」と返事した。

柚子が案内した場所には、目を見張るような素晴らしい大自然が広がっていた。スカイブルーの空の下、エメラルドグリーンの海のグラデーションが地平線へと続き、その先には、茜色の太陽の光がフレアのように広がっていた。

「ねえ、船乗ってみる？」

柚子がいたずらっ子っぽく言う。

「船なんてあるの？」

奎は声高に言った。

「あるよ、私のお父さんの船だけどね」

「えー。乗ってみたいですよ！」

琉里の声に張りが戻ってきた。

柚子が案内した場所には、目立った船などなかった。

「船ってどれ？」

「ん？ 君には見えないのかな？」

柚子が言うと

「あ、ひょとして、あの小舟ですか？」

琉里はすぐに気が付いた。

琉里が指さした先には確かに、一隻の小舟が海に浮かんでいた。

「正解！ んじゃあとはご自由に」

言って柚子は立ち去ろうとした。

「ちょ、ちょっと待って。これってオールで漕ぐタイプの船？」

「そうだよ」

柚子の言葉に、奎と琉里は顔を見合わせた。

「さあ、早く乗って乗って。朝になっちゃうよ」

柚子の後押しを受けて、奎と琉里は小舟の前に歩み寄る。

「なんだ、意外としっかりしてるじゃん！ この小舟」

奎が言うと琉里も頷く。

「さあ、奎くん。行こう！」

二人は小舟に乗り込んだ。

奎がオールを担当し、琉里は応援係。

はじめての船出は想像以上に心地よかった。

太陽の下を小舟はゆっくり進む。

穏やかな海の上、琉里が急に真剣な目つきになった。

「ねえ、奎くん。本当に私のこと愛してる？」

琉里は奎を見つめる。

「……。愛しているよ」

奎は小声で言う。恥ずかしくなって顔を赤らめた。

「じゃあ、お願い。ここでキスして」

言って琉里は瞳を閉じる。

「……。駄目だよ、琉里ちゃん！」

奎は琉里を叱った。

「え？」

琉里には何がなんだか解らない。

「結婚式の時までとっておこう！」

言って奎は琉里を抱き寄せた。

「ほら、僕の鼓動が聞こえるかい？」

「ええ。とっても速いのね」

「こんなにも君のことを愛してるんだ」

「……いつ結婚できるの？」

琉里は溢れ出る感情を抑え言った。

「今年中には結婚しよう」

奎の覚悟は固まっていた。

別荘に戻ったその日の夜、柚子のスマホが鳴った。非通知の着信。嫌な予感がした柚子が出ると、電話の向こうから聞こえてきたのは、粘着質な男の声だった。

「柚子さんですね。倉木です。随分と気前の良いことをしてくれましたね」

「……何のことかしら」

「違約金の一億円。あなたが肩代わりする手はずを整えてると聞きましたよ。ご両親の遺産を使い切つてまで友人を助けるとは、涙ぐましい友情だ」

柚子は背筋が凍る思いがした。まだ銀行としか話してない内容が、なぜ漏れているのか。

「何が望みなのか？」

「柊奎と如月琉里を社会的に抹殺する。それだけでは飽き足らない。彼らが築いてきた人間関係、家族、すべてを壊す。もちろん、あなたも例外ではありませんよ。あなたが過去、ある企業で不正会計の隠ぺいに関与していた疑惑……あれが表に出たら、今の仕事も続けられないでしょうね」

「なっ……あれは私は巻き込まれただけで……！」

「真実は関係ない。世間がどう思うかだ。それに……花蓮くんが言っていましたよ。奎くんの最大の弱点は琉里だけど、柚子さんが傷つくことも彼は耐えられない、ってね」

電話が切れると同時に、奎のスマートフォンにも通知が入った。送られてきたのは、柚子の過去に関する捏造記事のゲラ刷りと、琉里のピアノが明日、強制執行により差し押さえられるという通知だった。

「そんな……柚子まで巻き込むなんて」

奎は拳を震わせた。

「私のピアノ……売られるのね」

琉里は静かに呟いた。一億円の違約金に加え、さらに上乗せされた損害賠償請求。柚子の遺産だけでは足りず、さらに柚子自身も脅迫されている今、これ以上彼女に頼ることはできない。

「売りましょう」

琉里は毅然と言った。

「これで、すべて終わらせましょう。柚子さんに迷惑はかけられない」

翌日、目黒にある琉里のスタジオに二人はいた。奎ははじめてこおスタジオに招かれた。琉里は、ピアノへの想いを語る。

「このピアノはね、私の音楽人生の全てなの。ショールームではじめてこの子に触れた時、ああ幸せって思ったわ。一音ならしてみても、音色の美しさに聞き惚れた。瞬間的に、絶対にこの子連れて帰って決心した」

琉里はピアノを綺麗に拭きながら言う。

「そうだったんだね。このピアノは琉里の人生そのものかもしれないよね」

「うん。でも、いいの。私、気づいたの」

「何に？」

「大きなホールでコンサートを開くことを夢見ていた。そのために、自分が本当にやりたいジャズを犠牲にして、アニソンや歌謡曲も弾いたわ。テレビも出た。少しでも、多くのファンを獲得するためにね。でも、ファンが離れていったって初めて気づいた。私がしてきた活動の真意や意図は、彼らには伝わってなかった。私は、遠くの他人の評価ばかりを気にして、一番近くで応援してくれていたファンを大事にしていなかったのかもしれない」

「そんなことないよ。僕の心にはきちんと正確に伝わってる」

「奎くん、あなたは私のファンじゃない。私がずっと憧れていた大学の先輩だよ。そして、私はあたたを小説家として最大のリスペクトをしています」

言って琉里は天使のような笑みを浮かべた。

しばらくは沈黙が続いた。

ほどなくして琉里は鍵盤にむかった。

これが最後。私の魂の半身。

琉里が奏でたのは、即興の新曲だった。

静寂を切り裂くような激しさと、深海に沈んでいくような優しさ。相反する感情が絡み合う旋律。

炎の揺らめき。

激しさを増す愛の昂り。

やがては消えていく愛の灯。

静寂の中でひっそりと佇むピアニスト。

孤独の中で見つけた光。

絹のような極上の静けさ。

その全てが琉里の音を紡いでいく。

「ベルベットサイレンス」

弾き終えた琉里が、小さく曲名を告げた。

奎はただ、嗚咽を漏らして泣いていた。彼女から音楽を奪うことは命を奪うに等しい。それを知っているからこそ、胸が張り裂けそうだった。

ピアノが運び出され、部屋には重苦しい静寂と、二人の愛だけが残された。

17

17

夜が来た。満月が海を照らしている。

二人は再び、あの小舟のある港へと向かった。

逃げる場所など、もうこの地上にはないように思えた。東から風が吹いた。潮の薫りが辺りに立ち込めていく。迷いネコが光の方向へ走り去っていった。月の光は、水面に反射して輝きを帯びた。

二人は手を繋いで、小舟へと歩き出す。

「奎くん」

波打ち際に、琉里が足を止める。

「琉里さん。心から愛しています。二度とは戻れないかもしれない。それでも、ついてきてくれますか？」
奎は覚悟を決めた瞳で彼女を見つめた。

「あなたとならば安心して大海原に出れます。例えば、全てを捨てても……」

二人の唇が重なる。はじめてのキスは、涙の味がした。

その瞬間、満月が雲に隠れ、世界は一瞬、闇に包まれた。薄明りの中、浮かび上がる二人のシルエットは、あまりにも儚く、美しかった。

二人は小舟に乗り込み、沖へと漕ぎ出した。陸の明かりが遠ざかるにつれ、海は牙をむき始めた。昼間とは違う荒々しい夜の海流。

「きゃあっ！」

大きな波が小舟を打ちつけ、琉里が悲鳴を上げる。

「大丈夫だ！ 僕につかまって！」

奎は必死にオールを操るが、激流に煽られ、バキリという乾いた音が響いた。片方のオールが折れ、波間に消えていく。

「くそっ……!!」

制御を失った小舟は木の葉のように翻弄される。死の恐怖が二人を襲った。だが、二人は互いの手を決して離さなかった。

どれくらい時間がたっただろうか。

荒れ狂っていた波が、嘘のように静まり返った。

二人は命からがら、凪いだ海域へと流されていた。そこは音がない世界。極限状態を超えた二人の心に、不思議な安らぎが満ちてくる。

琉里がふいに口ずさんだ。

「……Here, s that rainy day……」

彼女の歌声は、ピアノの音がなくとも音楽そのものだった。透き通るようなその声に応えるように、厚い雲の切れ間から、微かに満月の光がさしこんだ。

一筋の光が、寄り添う二人と、傷ついた小舟を優しく照らす。

「見つかったか……」

奎が空を見上げて呟いた。それは月に対してであり、あるいは運命に対しての言葉だったかもしれない。琉里は奎の肩に頭を持たせかけ、光の差す方へほほ笑んだ。

「……生きる。ってことかしらね？」

月光の下、小舟はただ静かに漂っていた。二人の未来がどこへ向かうのか、それはまだ誰にもわからない。けれど、ベルベットのような静寂の中で、二人の鼓動だけが確かに重なり合っていた。

ベルベットサイレンス 終幕

ベルベットサイレンス

著 者 橋本 昂祈

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
